長崎県文化財調査報告書 第137集

広平遺跡

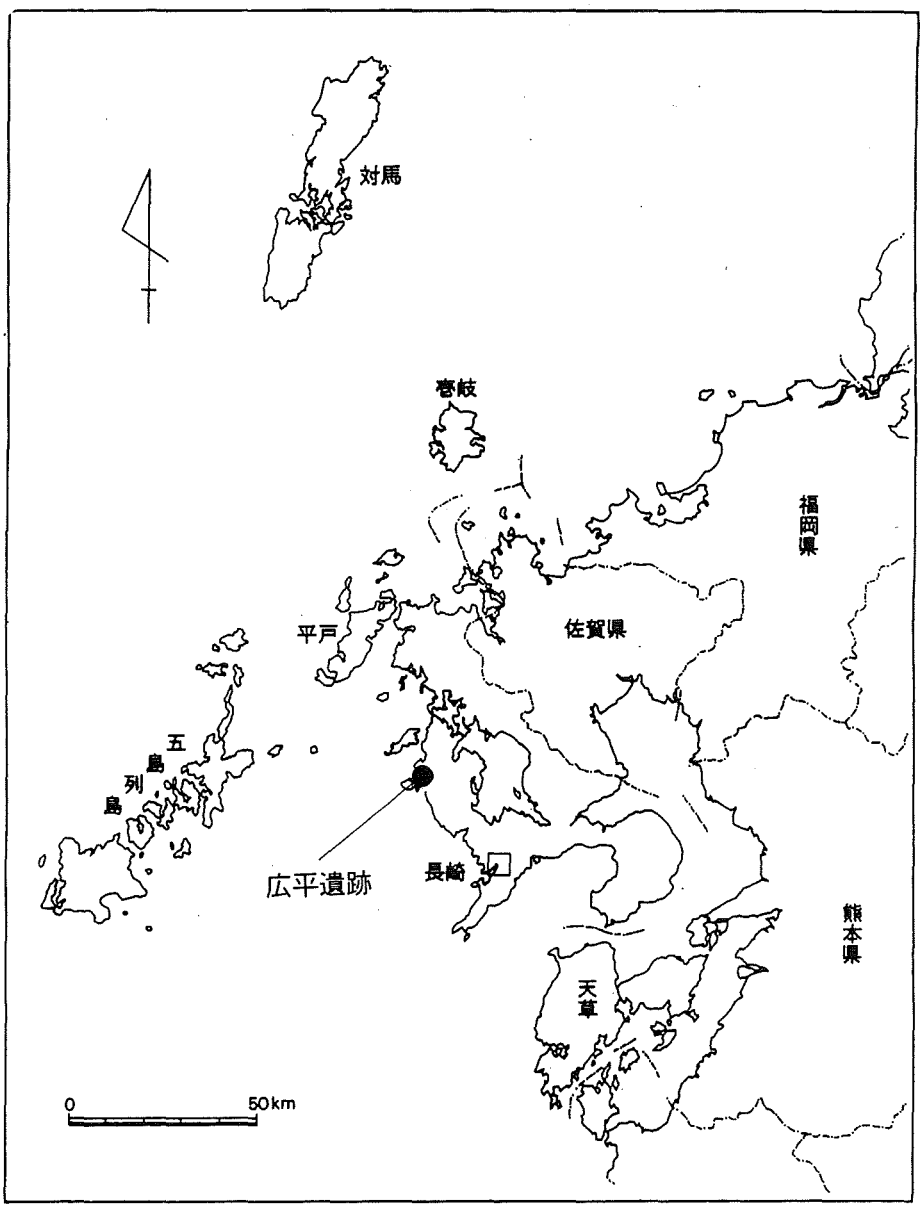
ひろ だいら

1997

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第137集

広平（ひろだいら）遺跡



発刊にあたって

このたび平成８年に実施いたしました大瀬戸町広平遺跡発掘調査報告書を発刊することとなりました。広平遺跡は，大瀬戸町の西部に位置し，五島列島を望む風光明媚な山中に立地する遺跡であります。西彼杵半島の西部は県立公園に指定されており，そのなかでも大瀬戸町は雪ノ浦川の清流が流れ，つがね落しの滝に代表される渓谷が発達し，夏ともなれば涼を求めて多くの人々が訪れます。

また同町には国指定史跡であるホゲット石鍋製作所跡に代表されるような，貴重な文化遺産が数多く残されております。このたびの広平遺跡の調査では，縄文早期に属するとみられる多くの石器が出土しました。これらは西彼杵半島の歴史を解明していくうえで貴重な発見になるものと思われます。発掘調査は農道整備事業にともなうものでしたが，このように西彼杵半島では近年いちじるしく開発が進んでおりますので，今後ともこの地の保存と開発の調整をはかっていきたいと思います。

最後に，今回の調査にあたりご協力いただきました大瀬戸町役場，大瀬戸町教育委員会ならびに地元関係者のみなさまに心から感謝を申し上げ発刊の挨拶といたします。

平成９年３月31日

長崎県教育委員会教育長

中　川　　忠

例　　言

1．本書は長崎県西彼杵郡大瀬戸町広平に所在する広平（ひろだいら）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は一般農道整備事業（過疎基幹）に伴い、平成８年１月16日から１月26日まで実施した。

3．調査は長崎県教育庁文化課が実施した。

4．本書の執筆はⅠ～Ⅳ章を古門雅高がおこない，Ⅴ～Ⅵ章を渡邊康行がおこなった。

5．本書の執筆にあたっては次の方々に多くのご教示を賜った。記して感謝する。

下川達彌（長崎県教育庁文化課課長補佐）・萩原博文（平戸市企画振興課市史編さん係長）・小畑弘己（熊本大学文学部助教授）・川道寛（長崎県文化課）・福田一志（長崎県文化課）・宮下雅史（長崎市教育委員会文化財課）・高田美由紀（長崎市教育委員会文化財課）

6．出土遺物の実測・製図は渡邊がおこなった。

7．出土遺物を除く製図は斉藤いづみと古門がおこなった。

8．本書関係の写真撮影は調査中のものは調査担当者がおこない，遺物については新野貴昌がおこなった。

9．本書関係の遺物は，長崎県教育委員会が保管している。

10．本書の編集は古門・渡邊がおこなった。

本 文 目 次

Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．発掘調査の組織と構成 …… 1
Ⅲ．遺跡の立地と環境 …… 2
　1．西彼杵半島の地質 …… 2
　2．大瀬戸町の地質 …… 2
　3．西彼杵半島の地形 …… 2
　4．大瀬戸町の地形 …… 3
　5．西彼杵半島における考古学的成果と今後の課題 …… 4
Ⅳ．調査の概要 …… 10
　1．範囲確認調査の概要 …… 10
　2．本調査の方法 …… 10
　3．基本層位 …… 12
Ⅴ．出土遺物 …… 14
　1．概要 …… 14
　2．第４層出土の石器 …… 16
Ⅵ．考察　－石器群の特徴と編年的位置に関する二，三の問題－ …… 30
　1．はじめに …… 30
　2．Ｃ類石核と「柏原型石核」の類似 …… 30
　3．打製石鏃について …… 32
　4．局部磨製石鏃と石匙の欠落 …… 33
　5．結語　－広平遺跡石器群の編年的位置－ …… 35

挿図目次

第１図　西彼杵半島の表層地質図（ｓ＝１／125,000）…… 3

第２図　西彼杵半島の時代別遺跡分布図（ｓ＝450,000）…… 5

第３図　前島の墳墓群と古墳群 …… 7

第４図　広平遺跡周辺地形図（ｓ＝１／50,000）
および広平遺跡の試掘坑・グリッド配置図（ｓ＝１／1,250）…… 11

第５図　広平遺跡土層図（ｓ＝１／40）…… 13

第６図　第４層出土石器組成グラフ …… 15

第７図　第４層出土石器実測図①（ｓ＝２／３）…… 17

第８図　第４層出土石器実測図②（ｓ＝２／３）…… 19

第９図　第４層出土石器実測図③（ｓ＝２／３）…… 20

第10図　第４層出土石器実測図④（ｓ＝２／３）…… 21

第11図　第４層出土石器実測図⑤（ｓ＝２／３）…… 23

第12図　第４層出土石器実測図⑥（ｓ＝２／３）…… 24

第13図　第４層出土石器実測図⑦（ｓ＝２／３）…… 25

第14図　表土・排土・表面採集の石器実測図（ｓ＝２／３）…… 26

第15図　広平遺跡のＣ類石核（Ａ～Ｄ）と柏原型石核（Ｅ～Ｊ）…… 31

第16図　広平遺跡の第２類石鏃（Ａ）と類似資料（Ｂ～Ｈ）…… 33

表 目 次

第１表　広平遺跡石器集計表 …… 15

第２表　石器観察表① …… 28

第３表　石器観察表② …… 29

図版目次

図版①　調査地遠景・土層 …… 40

図版②　第４層出土石器① …… 41

図版③　第４層出土石器② …… 42

図版④　第４層出土石器③ …… 43

図版⑤　第４層出土石器④ …… 44

図版⑥　第４層出土石器⑤ …… 45

図版⑦　第４層出土石器⑥ …… 46

図版⑧　第４層出土石器⑦ …… 47

図版⑨　表土，排土，表面採集の石器 …… 48

Ⅰ．調査に至る経緯

広平遺跡は昭和57(1982)年に長崎県教育庁文化課による分布調査によって発見され，その存在が知られることとなった。平成７年10月には長崎耕地事務所による一般農道整備事業（過疎基幹）に伴う農道拡幅にともない，県文化課が範囲確認調査を実施した。調査の結果，遺跡の周辺は，昭和30年代にミカン栽培のために機械を導入してさかんに農地造成が行われ，旧地形を残すところは，わずかな範囲であることが判明した。工事にかかる部分では，TP5の周辺のみがかろうじて農地造成を免れていることがわかった（第４図）。TP5からは黒曜石やサヌカイトの剥片・石核などが出土したため本調査となった。

Ⅱ．発掘調査の組織と構成

１．範囲確認調査の調査組織

(1) 事業主体	長崎県長崎耕地事務所		
(2) 調査主体	長崎県教育庁文化課		
(3) 調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	古門　雅高
(4) 調査協力	大瀬戸町教育委員会	教育長	森山　　弘
		事務局長	江木　繁美
		社会教育担当	竹口　嘉生
		社会教育指導員	宮崎　善晴
	長崎耕地事務所	総務課専門幹	小島　年廣
(5) 調査補佐			渡邊　康行

２．本調査の調査組織

(1) 事業主体	長崎県長崎耕地事務所		
(2) 調査主体	長崎県教育庁文化課		
(3) 調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	古門　雅高
		文化財保護主事	甲斐田　彰
(4) 調査協力	大瀬戸町教育委員会	教育長	森山　　弘
		事務局長	江木　繁美
		社会教育担当	竹口　嘉生
		社会教育指導員	宮崎　善晴
	長崎耕地事務所	総務課専門幹	小島　年廣
(5) 調査補佐			渡邊　康行

(6) 調査作業員

今川一夫・川口三千人・川口すえ・小山　実・谷口カズ・堤田チズエ・富永初美・橋本嘉弘
濱田　定・浜田　勉・堀川ふみ・森山菊市・森山たき・峰原栄一・宮田末松・山下平市・山下好見

Ⅲ．遺跡の立地と環境

1．西彼杵半島[註1]の地質（第１図）

西彼杵半島の地質の大部分は，黒色片岩や緑色片岩の結晶片岩類と、これに貫入する火成岩の蛇紋岩よりなる。これらの結晶片岩類は西彼杵変成岩類とよばれ，長崎県のいわば土台の岩石であり，県内で最も古い時代の岩石である。西彼杵変成岩類は，古生代の海底に厚く堆積した有機物に富んだ泥質の地層が，造山運動により強い圧力と温度の影響で変成作用を受けて生じたものである。

西彼杵変成岩類の中には，結晶片岩に貫入する蛇紋岩がある。この蛇紋岩のまわりには，滑石・緑泥石・陽起石などの結晶が集まっている。鎌田泰彦によると「こうした西彼杵半島の蛇紋岩の周縁部に発達する鉱物帯はとくに『西彼杵型滑石鉱床』と呼ばれている。」という（鎌田1980）。

また，大瀬戸町の高帆山西麓には中生代の花崗岩が分布し，呼子ノ瀬戸以西の大島・崎戸町には第三紀層が堆積する。第三紀層の下部は陸成の赤崎層群で，漸移的に寺島層群に移行し，その上を松島層群が不整合に覆っている。松島層群は松島・福島・焼島などに分布する石炭を含む層で，海成層と汽水ないし淡水成の地層である。この松島層の上には西彼杵層群が不整合に堆積する。西彼杵層群は松島や西彼杵半島北西部に分布する海成層で，600mほどの厚みがあり，貝類や石灰藻などの化石を豊富に含んでいる。ここまでが古第三紀の所産である。つぎの新第三紀末には火山活動が活発になったため，玄武岩溶岩が，西彼杵変成岩類や第三紀層に貫入したり，またそれを覆ったりしている状況が西彼杵半島の北端部や北西端部でみられる。

2．大瀬戸町の地質

大瀬戸町の地質は古生代の「西彼杵変成岩類」の黒色片岩さらには緑色片岩と，新生代の第三紀層，および中新世末から鮮新世の玄武岩，そして高帆山周辺の中生代の花崗岩などから構成されている。沖積層は雪の浦川・多以良川そして柳の周辺に存在する。松島は第三紀層で構成され，遠見岳頂上付近は玄武岩が分布している。柳と多以良を結ぶ南北の細長い谷には多以良－瀬戸断層が走り，狭いながらも地溝盆地を形成している。

広平遺跡付近の表層地質は古第三紀地層である西彼杵層群のうちの蛎浦（かきうら）層とよばれる地層で，礫岩・砂岩・石灰質砂岩の互層となっている。

3．西彼杵半島の地形

西彼杵半島は長崎市の北西に位置し，半島東岸は「内海」（うちめ）と称され，大小の入江や小島が分布する溺れ谷地形をなす。一方，半島西岸は「外海」（そとめ）と称され，海岸は出入りの少ない断層崖からなる。「内海」は時津町・琴海町・西彼町・西海町の一部からなり，「外海」は外海町・大瀬戸町・西海町・大島町・崎戸町と長崎市の三重町が含まれる。「内海」と「外海」の交流は半島脊梁山地に阻まれ，容易ではなかったらしく，もっぱら海路に頼る交流が近代まで続いたという。

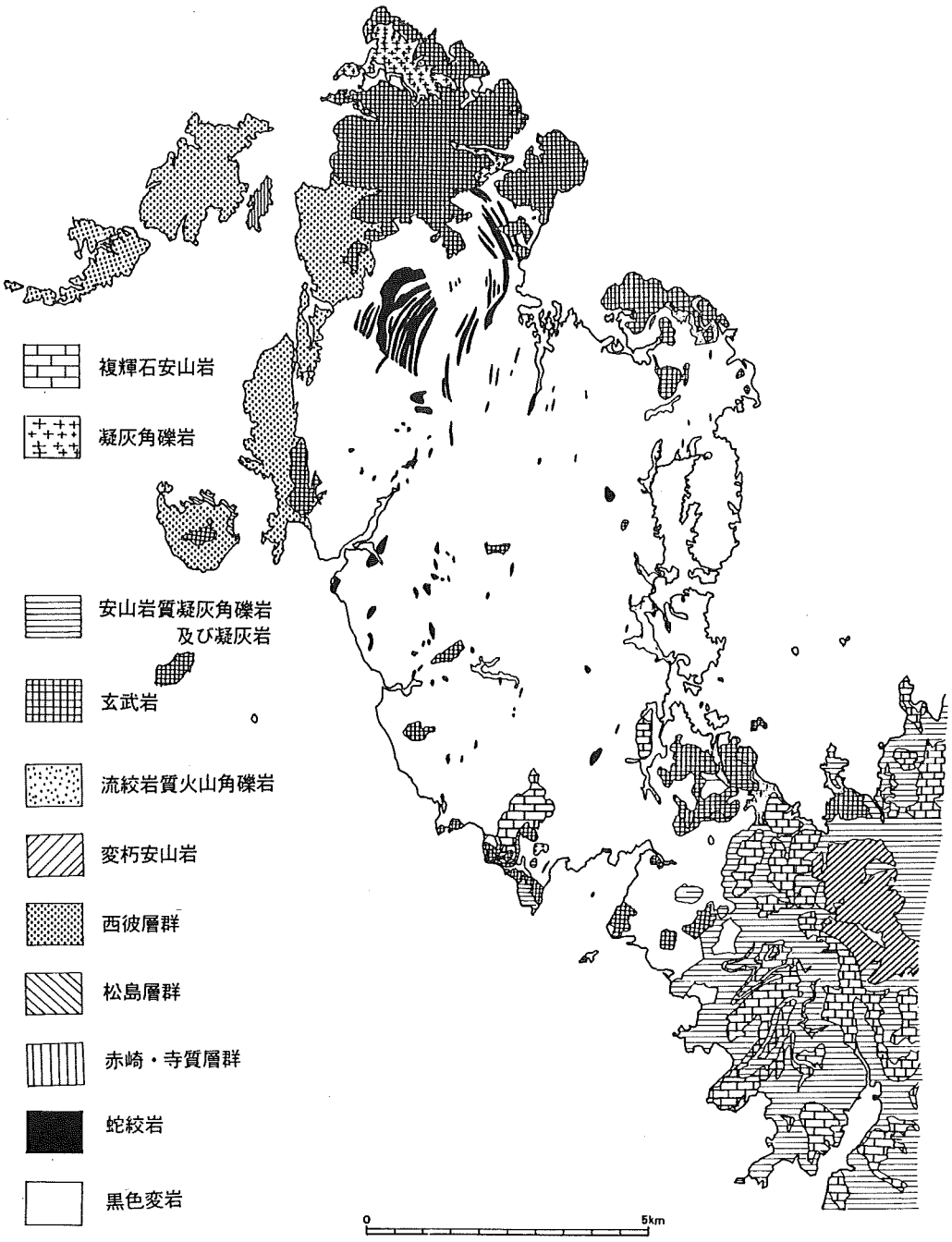
半島の大部分は丘陵性地形をなし，そのほとんどは標高400m内外の中起伏量の山地で，山頂部には隆起準平原が残存している。半島でもっとも高い山は半島中央部にある長浦岳で，標高560mである。河川は半島脊梁山地を分水嶺として大村湾に流入する水系と，角力灘に流入する水系がある。前者に

は柚子ノ川・鳥加川などがあり，後者には神浦川・多以良川・雪浦川・黒崎川などがある。

4．大瀬戸町の地形

大瀬戸町は外海の中央部に位置し，北は西海町，南は外海町，東は西彼町および琴海町に接する。平野は少なく，多以良方面の小地溝盆地と，雪浦川と河通川流域にわずかに沖積地があるのみである。

広平遺跡が存在する多以良地区は大瀬戸町の北部に位置し，北は西海町に接し，南は板の浦に通じ



第１図　西彼杵半島の表層地質図（Ｓ＝1/125,000）

ている。多以良地区には多以良－瀬戸断層線に沿って小地溝盆地が存在し，大瀬戸町では数少ない平野が存在する。この盆地を南北に多以良川が流れ，左岸を多以良外郷，右岸を多以良内郷と称している。広平遺跡はヒウ山や高帆山をもつ山塊の西側斜面に立地し，東に多以良川，および多以良盆地を望み，西に五島灘を一望するところに位置する。調査対象地の標高は約120～130mで，南向きの斜面をなし，現在は植林地となっている。

5．西彼杵半島における考古学的成果と今後の課題

(1) はじめに

西彼杵半島にのこる遺跡は，石鍋製作跡と近世遺跡を除くと現在約200遺跡を数える。

しかし発掘調査によってその内容が把握されている遺跡は，ケイマンゴー遺跡・天久保遺跡（西海町），寺島遺跡（大島町），串島遺跡（大瀬戸町），出津遺跡・宮田石棺群（外海町），前島古墳群（時津町）にすぎない。しかし，数は少ないもののいずれも重要な遺跡であり，ここではこれらの遺跡の調査成果を近年の考古学的知見に照らしながら概観し，今後の課題をも抽出したい。

(2) 遺跡の分布（第２図）

西彼杵半島における遺跡分布をみると，縄文時代に増加し，弥生・古墳時代になると激減していることがわかる。とくに古墳時代の遺跡は少ない。次の古代・中世の遺跡数は弥生時代なみに回復し，石鍋製作跡を加えると，さらに増加することからして，古墳時代の遺跡の少なさが際だっているといえる。遺跡の減少は弥生中期後半から始まり、古墳時代にいたる。

また，遺跡の立地という点からみると，旧石器・縄文時代は標高300mの等高線上，あるいはそれより高位にも遺跡が分布するのに対して，弥生時代以降は標高が低い場所に集中している。このことは古代・中世にも共通するものである。

(3) 旧石器時代の遺跡

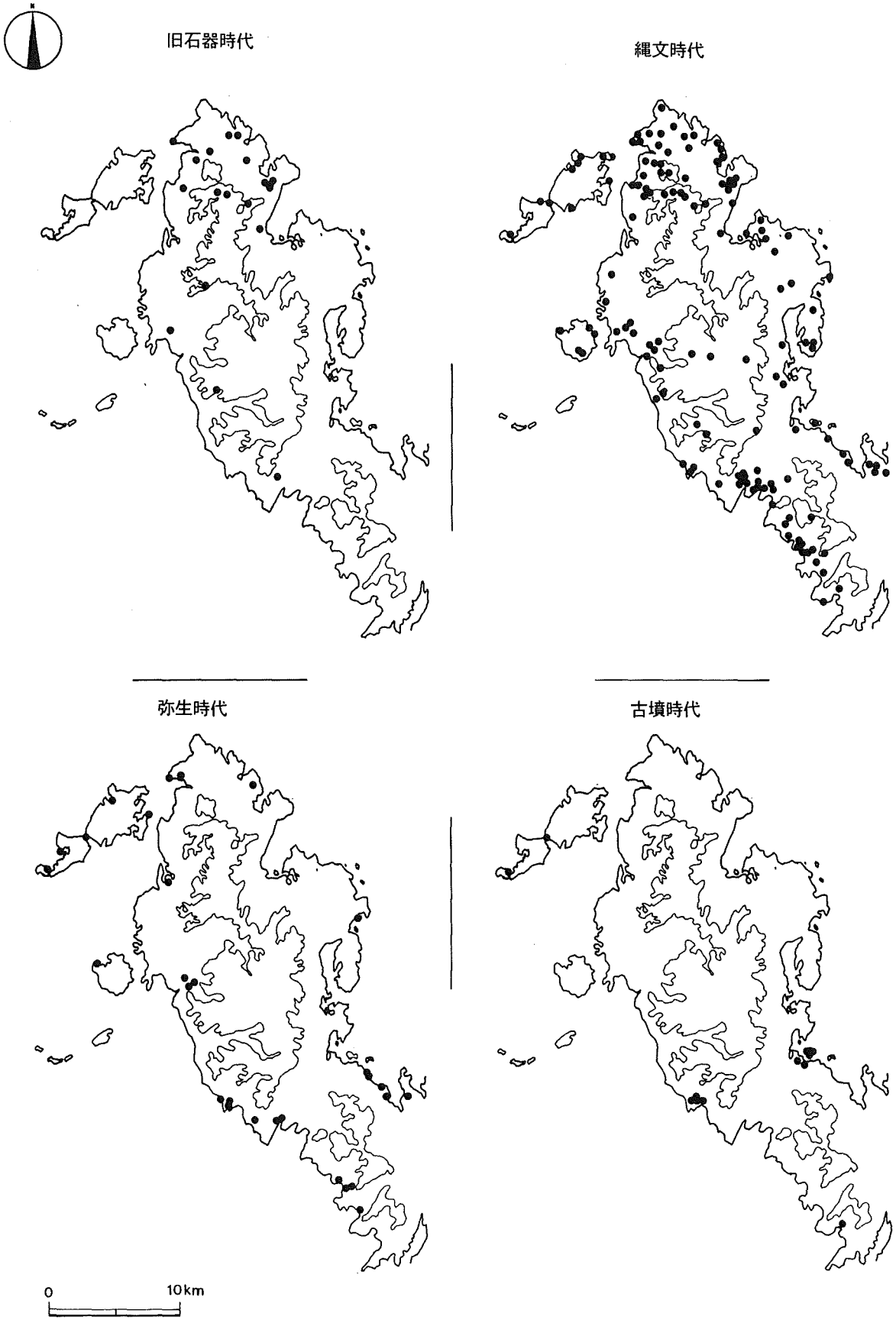
正規の発掘調査が行われた遺跡は西海町ケイマンゴー遺跡（副島1980)と長崎市柿泊遺跡のみである[註2]。

(4) 縄文時代の遺跡

発掘調査による草創期の資料は知られていない。また早期の土器資料も発掘調査では出土していない。

大島町寺島遺跡では前期の曽畑式土器と後期初頭の南福寺式土器，後期後半の三万田式土器が出土している。曽畑式土器は最古型式のものではなく，曽畑式盛期の資料である（久原・川道1981)。曽畑式土器については，その起源を水ノ江和同のように西彼杵半島近隣に考える研究者もいて，今後の研究課題である（水ノ江1990)。

外海町出津遺跡からは多くの後期土器とともに南九州を中心に分布する市来式系土器が出土して注目される（平野1983)。市来式土器は諫早市有喜貝塚・福江市白浜貝塚・富江町宮下貝塚・小値賀町殿崎遺跡から出土し，本県では橘湾沿岸から五島列島にかけて見られる。出津遺跡の資料もその分布域に沿ったものであろう。南九州系土器文化の流入は縄文早期・中期・後期に，本県南部および五島



第２図　西彼杵半島の時代別遺跡分布図（S=1/450,000）

列島ではきわめて顕著であり，かなり普遍的な文化伝播のルートとみられ，大村湾沿岸を含む県北域とは異なった様相を示している。

また西海町ケイマンゴー遺跡からは晩期の黒川式土器段階の埋甕が出土し，同遺跡の中屋敷地点からは刻目突帯文土器の甕棺が出土している（横山1980)。この刻目突帯文土器は藤尾慎一郎によるとⅢＡ類２群とされ，藤尾編年Ⅱ期に該当し，夜臼Ⅱａ式併行期とされる（藤尾1990)。

最近，西海町天久保遺跡の支石墓を，九州大学が発掘調査をおこなった。２基の支石墓と１基の石棺墓が調査されているが，そのうちの第３号支石墓からは15個の碧玉製管玉が出土し，注目された。支石墓から出土した15個の管玉は福岡県前原市井田用会支石墓の22個に次ぐ数である（西谷1997)。

また，長崎市手熊町では新たな大規模貝塚の発見があり，未調査であるが，概要が報告されている（宮下・高田1994)。西彼杵半島外海側では、拠点的集落が一定の距離をおいて存在することが知られている。

(5) 弥生時代の遺跡

外海町出津遺跡からは板付系甕と，縄文系の刻目突帯文甕の両方の特徴を有する折衷系土器が出土している（平野1982)。このタイプの甕形土器は佐世保市四反田遺跡からも出土しており，四反田遺跡では甕Ｂ類として分類されている（久村1994)。本県でも一定の分布域をもちそうである。折衷系土器について研究をおこなった藤尾慎一郎によると佐賀平野では藤尾編年佐賀平野Ⅲ期（板付Ⅱａ式併行）に出現し，Ⅴ期（城の越式併行）まで存在し，筑後平野では藤尾編年筑後平野Ⅱ期（板付Ⅱｂ式併行）に出現し，同Ⅲ期（城の越式併行）まで存続するという（藤尾1984)。

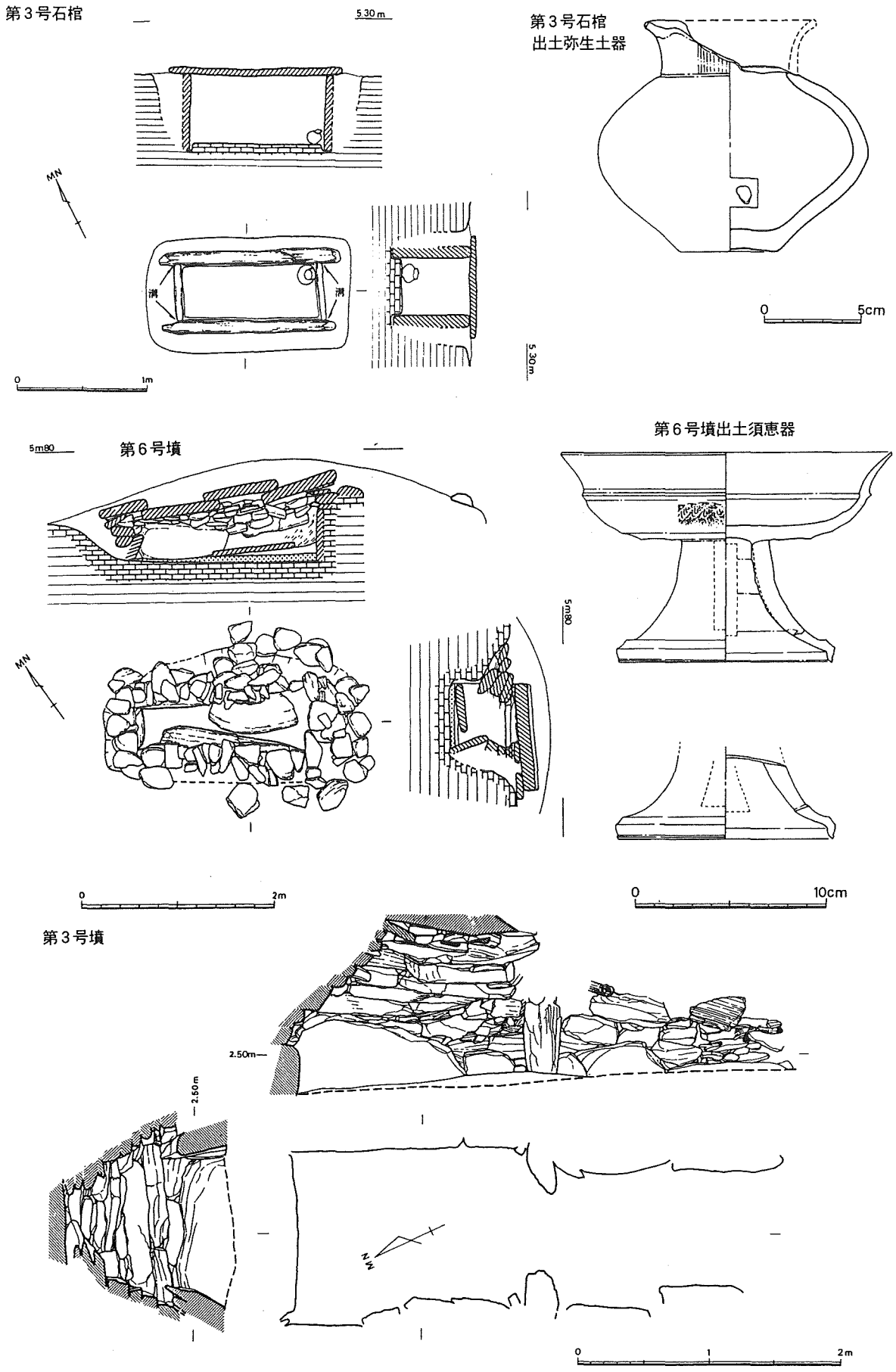
また先述の天久保遺跡では，県教委の調査により天久保貝塚の形成が刻目突帯文土器段階に開始され，弥生中期まで存続することが判明した。朝鮮系無文土器も出土しており，注目される（安楽1994)。

また時津町の前島古墳群のなかに，弥生時代中期初頭の石棺群が存在することが発掘調査によって明らかとなった（福田1994)。第３号石棺墓および第５号石棺墓は棺内に小形壷を副葬しており，縄文晩期の支石墓からの系譜をひく習俗と考えられる。正規の発掘調査による出土ではないが，西彼町の白浜石棺群においても須玖Ⅰ式の小形壷形土器が石棺内に副葬されていた[注3]。宮崎貴夫によると西北九州の弥生墳墓における土器供献は「縄文晩期の支石墓段階から顕著となり，弥生中期後葉の須玖Ⅱ式までは確実にみられる」という（宮崎1995)。前島石棺群や白浜石棺群の土器供献の有り様は，宮崎の見解を支持するものである。

(7) 古墳時代の遺跡

古墳時代の遺跡は，前代までと比較すると極めて少ない。

西彼杵半島西岸および長崎半島が高塚古墳の空白地帯であることは現在も変わっていない。しかし高塚墳以外の古墳時代墳墓はいく例か知られている。外海町宮田墳墓群は石棺墓群で，Ａ地区１号墳には結晶片岩を用いた石枕が副葬されていた。同墳墓には結晶片岩製の刀子および珠文鏡も副葬されており，５世紀前半から中頃の墳墓とみられている[注4]。



第３図　前島の墳墓群と古墳群

時津町の前島古墳群は西彼杵半島で発掘調査がおこなわれた唯一の横穴式石室墳である[註5]。近年，時津町教委により二度の調査が行われている（藤田1991・福田1994)。このうち３号墳は両袖式の単室の横穴式石室墳であった。一方，７号墳は内部主体が石棺系横口式石室で，石室内部から鏡が出土した。この鏡は陶邑Ⅰ型式３段階に併行する資料と思われ，５世紀の第４四半期の実年代が与えられる。また第６号墳墳丘裾部より出土した高杯もほぼ同時期のものと考えられ，大村湾奥の古墳に，このような古い段階の須恵器が副葬されていたことは大変興味深い。大村湾東岸から「外海」，ないし長崎半島西岸へ抜ける際に，時津に上陸して陸路をとったとすると，前島は地理的にきわめて要衝に位置するといえる。なお、前島１号墳からは仿製鏡の出土があったといわれている（藤田1994)

(8) 古代の遺跡

大瀬戸町串島遺跡では，出土須恵器の検討から遺構の盛期が串島Ⅰ期（７世紀後半代中心），串島Ⅱ期（７世紀末頃から８世紀前半代），串島Ⅲ期（８世紀末から９世紀前半前半頃）にあったことが推察されている（宮崎1980)。この編年は今日においても変更の必要はないと考える。

串島遺跡からは玄海灘式製塩土器と布痕焼塩土器が出土している。製塩土器は西彼杵半島では唯一の調査資料である。本県の製塩土器については宮崎貴夫の総括的な論攷がある（宮崎1994)。

(9) 中世の遺跡

寺島遺跡からは中世の貝塚が調査されている。大瀬戸町の小田遺跡においても近年，中世貝塚が発見調査されている[註6]。

(10) 中世山城跡

西彼半島では28ほどの中世山城が存在する。いずれも発掘調査は行われておらず，詳細は不明なところが多い。中世の西彼杵半島には浦々に中小の土豪が割拠していた。史跡と認識されている山城は西海町の下り山（さがりやま）城跡，西彼町の刎木城跡，琴海町の舞岳（まいだけ）城跡，大瀬戸町の鳥越（とりごえの）城跡と多以良城，外海町の神浦城跡，時津町の春（はるの）城（原城）跡などがある（外山1982)。今後，町の史跡指定などの保護措置が急務であろう。

(11) 石鍋および石鍋製作所跡

西彼町ホゲット遺跡の調査以降，石鍋製作跡の目立った調査はおこなわれていなかったが，平成８年に県教委によって大瀬戸町下茅場（しもかやば）遺跡の発掘調査がおこなわれた。確認された遺構は移築保存されることとなった[註7]。

これまで，常に石鍋研究をリードしてきた下川達彌は近年，石鍋の終焉について論じ，古代から中世の代表的な甘味料であった甘葛（あまずら）を煮るために使用されていた石鍋が，中世末から近世に甘味料が砂糖に取って変わられることによって消滅していったという新たな学説を発表している（下川1995)。

[註]

註１　本稿で扱う西彼杵半島とは長崎・時津断層線より以西である。したがって行政的には北から西海町・大瀬戸町・西彼町・外海町・琴海町・時津町・長崎市の一部となる。

註２　現在，長崎市教育委員会が整理中である。

註３　長崎県教育庁文化課の下川達彌・長崎県教育庁壱岐原ノ辻遺跡調査事務所の宮崎貴夫両氏より教示をえた。

註４　九州の石枕は肥前・筑後の有明海沿岸，とくに菊池川流域に分布の中心があり（白井1993),その縁辺部に箱式石棺にともなう石枕が分布するようである。珠文鏡については九州では５世紀初頭から６世紀代に副葬されるという（東中川1975)。

註５　西彼町喰場郷中島・同白似田郷猫塚・同白崎郷膝行神（いざりがみ）などの台地・丘陵には円墳が存在し，琴海町村松郷には大石古墳が存在するといわれ，西彼半島東岸は高塚墳の分布域となっている。

註６　平成６年に県文化課が町営住宅に伴う範囲確認調査を実施した。一部発掘し，現状で保存している。なお西彼町膝行神（いざりがみ）にも中世貝塚が存在する。佐世保市龍神洞穴では発掘調査により平安末から中世の貝層が確認されている（下川1975)。

註７　平成９年度に調査報告書刊行予定である。

[引用・参考文献]

安楽勉1994「天久保遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』長崎県教育委員会

大瀬戸町1997『大瀬戸町郷土誌』

鎌田泰彦1975　「表層地質」『土地分類基本調査　神浦』長崎県土地対策室

鎌田泰彦1980　「西彼半島の滑石」『大瀬戸町石鍋製作所遺跡詳細分布調査報告書』　大瀬戸町文化財調査報告書　第１集　長崎県大瀬戸町教育委員会

久原巻二・川道寛編1981『寺島遺跡予備調査報告書』大島町文化財調査報告書第１集　大島町教育委員会

下川達彌1975「(7)総括」『龍神洞穴調査報告』佐世保市文化科学館文化財報告Ⅲ　佐世保市文化科学館

下川達彌1995「生活を変えた職人たち」『中世の風景を読む７－東シナ海を囲む中世社会』新人物往来社

白井久美子1993「石製立花と石枕の出現－枕造り付け木棺考－」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集　早稲田大学出版部

副島和明1980「先土器時代の石器」『ケイマンゴー遺跡』

外山幹夫1982「史跡」『長崎・西彼の文化財』長崎県文化財調査報告書第62集　地区別文化財総合調査概報

長崎県地学会編1971『長崎県の地学』

西谷正1997「長崎県・天久保支石墓の調査」『東アジアにおける支石墓の総合的研究』九州大学文学部考古学研究室

東中川忠美1975「珠文鏡について」『恵子若山遺跡』恵子遺跡調査会・東洋開発株式会社

久村貞男編1994『四反田遺跡』佐世保市教育委員会

平野敏和編1983『出津遺跡』外海町文化財調査報告書第２集　外海町教育委員会

藤尾慎一郎1984「弥生時代前期の刻目突帯文系土器－「亀ノ甲タイプ」の再検討－」『九州考古学』第59号

藤尾慎一郎1990「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』26　国立歴史民俗博物館

藤田和裕1991『前島古墳群』時津町埋蔵文化財調査報告書第１集　時津町教育委員会

藤田和裕1994「長崎県」『共同研究「日本出土鏡データ集成」２』国立歴史民俗博物館研究報告第56集

福田一志1994『前島古墳群Ⅱ』時津町埋蔵文化財調査報告書第２集　時津町教育委員会

水ノ江1990　「6西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡　長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』多良見町教育委員会　同志社大学考古学研究室

宮崎貴夫1980「出土土器」『串島遺跡』長崎県文化財調査報告書第51集　電源開発株式会社・長崎県教育委員会

宮崎貴夫1994「9.長崎県」『日本土器製塩研究』青木書店

宮崎貴夫1995「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化－西北九州地域との比較を中心として－」『風土記の考古学5』同成社

宮下雅史・高田美由紀1994「長崎市における新発見の貝塚遺跡」『長崎市立博物館報』34長崎市立博物館

横山巳貴子編1980『ケイマンゴー遺跡』長崎県文化財調査報告書第52集　西海石油共同備蓄株式会社・長崎県教育委員会

渡邊康行1984「長崎市式見遺跡採集の遺物」『長崎県の考古学Ⅱ』長崎県考古学会

Ⅳ．調査の概要

１．範囲確認調査の概要

調査に先立つ平成７年10月17日に長崎耕地事務所職員とともに現地に出向き，試掘地の選定を行った。試掘壙は2m×2mとし，北からTP1～TP8とした（第４図）。

TP1・２は，付近のミカン畑より黒曜石の剥片が採集されたため設定した。現在は雑木林となっているが，かつては畑として利用されていたところである。上段の旧畑にTP1，下段の旧畑にTP2をいれた。両者ともに，表土下は赤褐色の粘質土で付近の地山の土層であった。60cm掘り下げたが遺物の出土はなかった。

TP1・２のさらに北にTP7を設定した。当初は予定していなかったが，わずかな平坦地があり，竹林となっていたため，1m×1mの範囲を試掘した。その結果，表土の下が耕作土（厚さ30cm）で，その下は砂岩の風化礫を含む地山であった。遺物の出土はなかった。

TP3・４は南に舌状に張り出す平坦地となっていたため，包含層の存在が期待されたが，表土・耕作土の下は赤褐色粘質土（地山）であった。地山の表面には耕作によるものと見られる不整形の溝や，掘削の痕が残存していた。調査中に地権者の話を聞くことができた。それによると，旧地形は傾斜地であったため，重機をいれて平坦にしたということで，包含層はほとんど削平されたと判断した。しかし，耕作土のなかに黒曜石片が若干混入しており，TP3からは局部磨製石斧も出土した。

TP5，6，8は植林地に設定した。地権者の話によると，TP8の一帯は昭和30年代後半に重機をいれて削平したということであり，試掘の結果も，表土下は地山の風化礫混じりの客土であった。

TP5および６付近は，重機をいれていないということで，そのことを裏付けるように，TP5では表土下に暗黄褐色の包含層（厚さ60～70cm）を確認した。出土遺物は黒曜石やサヌカイトなどの剥片である。

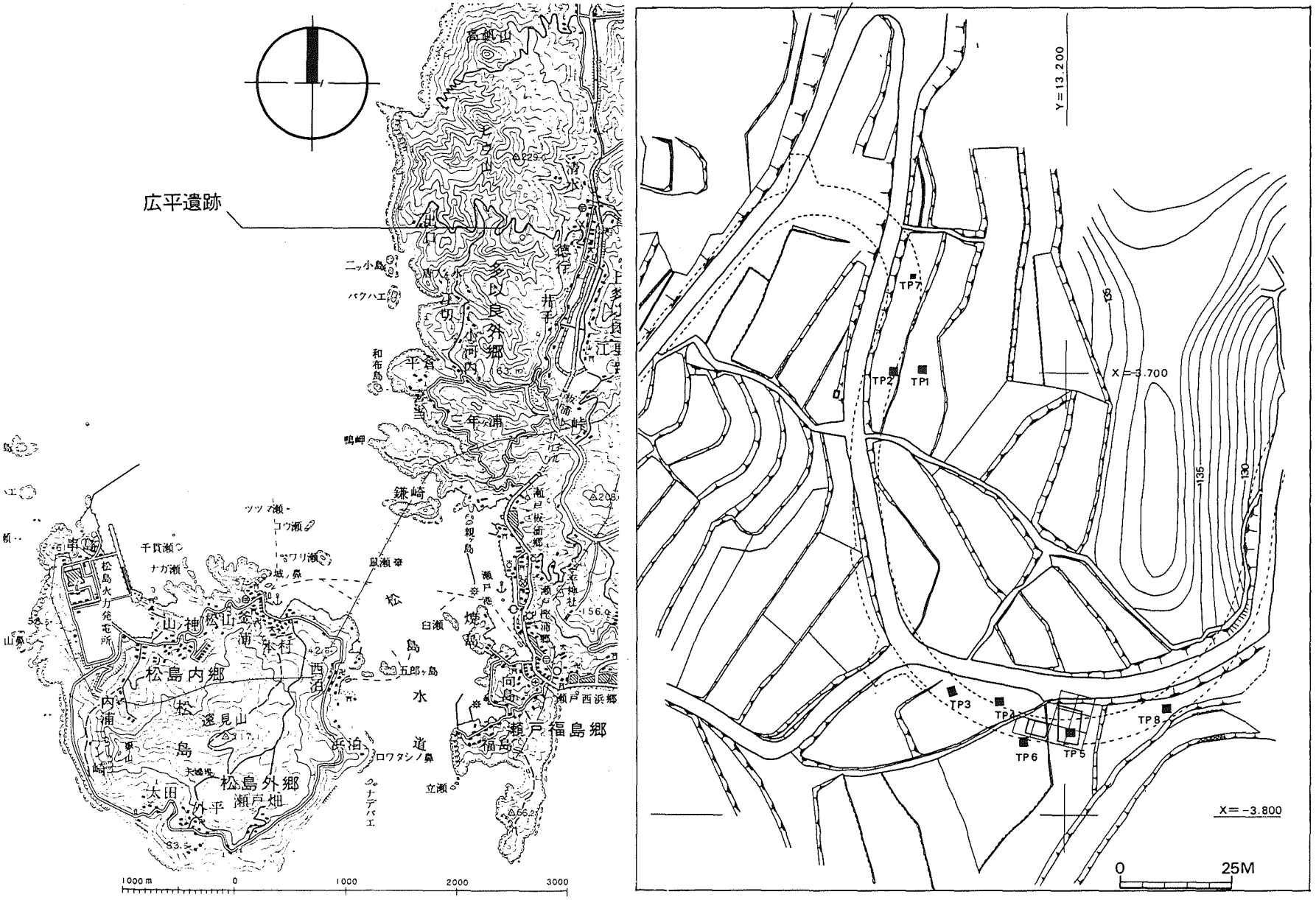
以上のような試掘の結果から，TP5の畑を中心として，プライマリーな土層の堆積があることが確認された。

２．本調査の方法

調査は地形測量の際に使用された測量杭であるT36とT37を基準として，T36をグリッドの原点とし，T37を見通した線を東西方向の基軸線とし，T36から南に90度振って南北方向の基軸線とした。さらに東西，南北の方向に4m×4mのメッシュをかけ，グリッドを設定した。グリッド名は東西列をアルファベットで，南北列をアラビア数字で表し，各グリッドの北東に位置する杭の名称をグリッド名にあてた。

調査区は地形の傾斜と土地の形状にあわせて設定し，東から１区・２区とした。１区には土層観察用の畦を残した（第４図）。

１区の遺物は各グリッドを４分割した小グリッドのそれぞれの中心点を計測原点とし，Ｘ・Ｙ・Ｚの座標により一点一点，記録していった。２区の遺物は平板測量により一点一点記録した。



第４図　広平遺跡周辺地形図（S=1/50,000）および広平遺跡試掘抗・グリット配置図（S=1/1,250）

3．基本層序（第５図）

色調的には４層に分けられるが、遺物包含層として認定できるのは第４層のみで、第１層～第３’層および黒色土は攪乱層である。また第４層の下は地山層である。

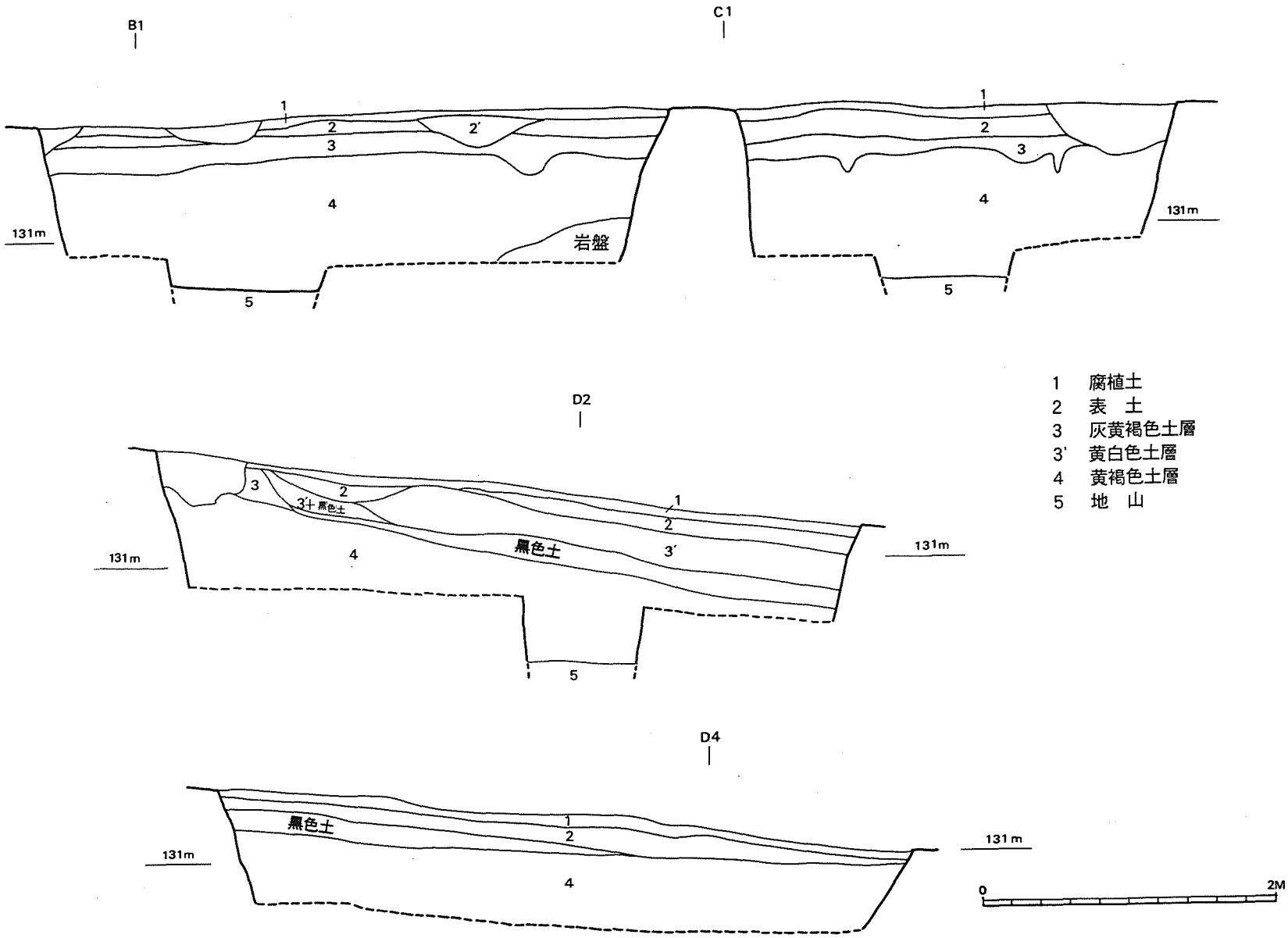
第１層、第２層は表土ならびに腐植土である。

第３層は灰褐色土層で，土質は第４層と同じであるが，有機物を含み灰黒色に濁っている。この層はＣ１・Ｃ２グリッド付近では多量の角礫を含んでいるため第３’層（黄白色土層）として分離した。一部では下位の黒色土と混在した様相を示している。

黒色土層はＣグリッド列を中心に第３層の下位にレンズ状に認められる。多量の有機物を含んでおり，土地の高低差を是正するための客土と考えられる。

第４層は黄褐色土層で，遺物包含層である。上半部は締まりが強く、砂岩や泥岩の角礫を比較的多く含む。部分的に酸化鉄の着色による赤褐色化が認められる。下半部は上半部に比べて角礫の混入が少なく粘性に富む。色調的にも、やや黄色みが強い。このため調査時には上半部を第４ａ層、下半部を第４ｂ層として捉えていたが、境界が明瞭ではなく、遺物の出土状態からも異なる文化層として認定することが困難だったため、結果的には単一層として扱った。遺物は黒曜石とサヌカイト質安山岩を主体とする石器群で、石鏃を主体としていることから縄文時代の所産と考えられたが土器は、細片さえも発見することができなかった。本層は全体に微細な炭化物片を含んでいるが、特定の集中は認められず、炉址や柱穴、土坑などの遺構は検出されなかった。

第５層は、岩盤の風化したもので、地山層である。



第5図 広平遺跡土層図（S=1/40）

Ⅴ．出土遺物

1．概　要

今回の調査では、第４層から打製石鏃を主体とする石器群が出土した。旧石器時代のナイフ形石器も１点発見されたが、大半は縄文時代の所産と考えられる。遺構を伴わず土器も出土しなかったため編年的な位置については石器の特徴や剥片剥離技術から推察するほかないが、包含層が単一であること、石器群の内容も単純でまとまりがあること、明らかな異時期資料の混在が見られないこと、などから比較的限定された時間幅での一括資料と考えられる。

第１表は、石器群の器種別数量を示したものである。資料を包含層出土分に限定すれば打製石鏃を主体とする貧弱な構成であるが、上述の理由から表面採集資料や表土層、撹乱層中出土の遺物も本来は第４層中に遺存していた可能性が強く、これらを加えての石器組成としてみれば、縄文時代の基本的な在り方を示していると言えよう。具体的には剥片石器として打製石鏃、掻器・削器類、彫器、石錐？、二次加工を有する剥片、使用痕を有する剥片があり、礫石器類では局部磨製石斧、打製石斧、礫器、敲石、加工痕を有する結晶片岩礫がある。

石材は、剥片石器の大半が黒曜石とサヌカイト質安山岩で、ほかの石材としてはチャート（石核）と玉髄（剥片）各１点があるに過ぎない。いずれも遺跡周辺には産出しないものである。黒曜石は外観や色調、不純物の有無などにより以下の四種に大別できる。

【黒曜石Ａ】　極めて良質な黒曜石で、色調は漆黒色～黒色を呈する。光沢や透明度および礫面の状態などにより細分可能とも思われるが、ここでは一括した。原産地としては佐賀県伊万里市腰岳や長崎県松浦市星鹿半島が考えられる。

【黒曜石Ｂ】　黒色～黒灰色を呈し、微細な不純物を含むものである。黒曜石Ａに比べてやや光沢が劣り、透明度も低い。部分的には黒曜石Ａのように良質なガラス光沢を呈するため、砕片については厳密な分離が困難である。

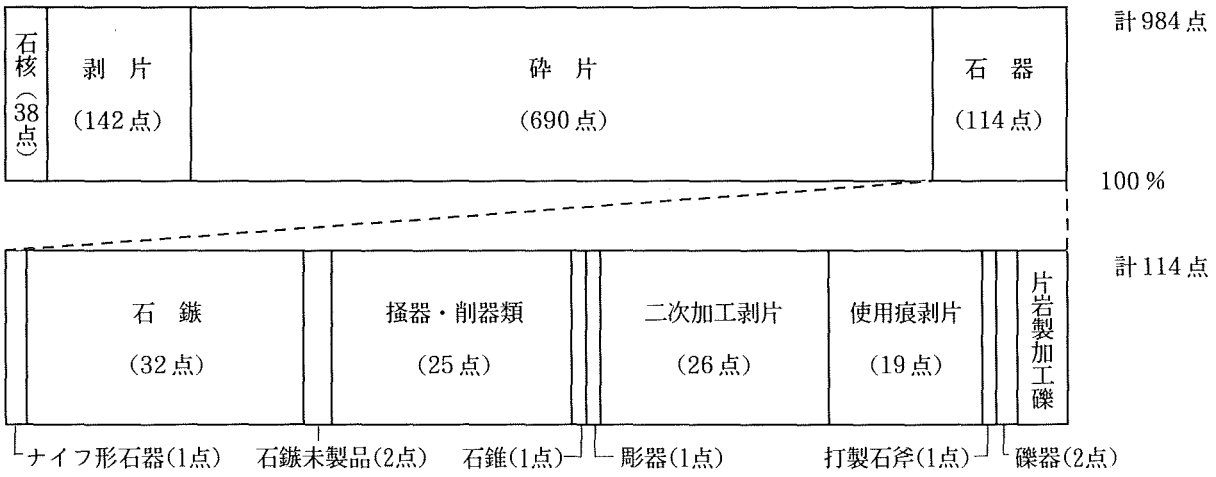
【黒曜石Ｃ】　色調や透明度は黒曜石Ｂに近いが、１㎜程度以上の不純物を含むものである。従来、阿蘇系と呼ばれているものに酷似する。量的には極めて少ない。

【黒曜石Ｄ】　黒灰色～暗灰色、灰青色の黒曜石で、量的に最も多い。剥離面はスリガラス状に風化しており新鮮な面と比べた場合の色調差が著しい。白色の不純物を含む例も少なくない。原石は表皮が海綿状や薔薇状を呈し、円礫及び亜角礫である。佐世保市針尾島や淀姫産と考えられる。

礫石器類の石材としてはサヌカイト質安山岩（礫器）、結晶片岩（加工痕を有する礫）、粗粒砂岩（打製石斧・礫器）、輝石安山岩（敲石）、頁岩（打製石斧）、ホルンフェルス（局部磨製石斧）がある。このうち結晶片岩と粗粒砂岩は外見の特徴から判別が容易であり、遺跡周辺に広く分布することが確認されている。輝石安山岩、頁岩、ホルンフェルスと認定したものに関しては、風化が進んでいることもあって確実性を欠くが、遺跡周辺では見られない石材であり、搬入石材と考えられる。

第1表　　広平遺跡石器集計表

器種 ＼ 石質	層位	黒曜石 A	黒曜石 B	黒曜石 C	黒曜石 D	サヌカイト	チャート	玉髄	砂岩	頁岩	輝石安山岩	ホルンフェルス	結晶片岩	第4層合計	層位不明計	合計
石核	4層	11	5	3	17	1	1							38		
	不明		1		1										2	40
剥片	4層	16	13	1	69	37		1	5					142		
	不明	7	3		17	3			2						32	174
砕片	4層	245	65	6	324	42			8					690		
	不明	34	11	2	45	2			1						95	785
ナイフ形石器	4層				1									1		
	不明															1
石鏃	4層	8	4		18	2								32		
	不明				2										2	34
石鏃未製品	4層				2									2		
	不明															2
掻・削器類	4層	4	1		10	10								25		
	不明					1									1	26
石錐	4層				1									1		
	不明															1
彫器	4層				1									1		
	不明	1													1	2
二次加工剥片	4層	7	2		14	3								26		
	不明															26
使用痕剥片	4層	9	1	1	8									19		
	不明															19
打製石斧	4層								1					1		
	不明									1					1	2
局部磨製石斧	4層															
	不明											1			1	1
礫器	4層					1			1					2		
	不明															2
敲石	4層															
	不明										1				1	1
片岩製加工礫	4層												4	4		
	不明															4
4層合計		300	91	11	465	96	1	1	15				4	984		
層位不明合計		42	15	2	65	6			3	1	1	1			136	
合計		342	106	13	530	102	1	1	18	1	1	1	4			1120



第6図　第4層出土石器組成グラフ

2．第４層出土の石器

(1) 旧石器時代の遺物（第７図１）

縦長剥片の左側辺に「L」字形のブランティングを施したナイフ形石器である。表面は風化が進行しているため剥離面の状態はやや不明瞭である。旧石器時代の資料としては唯一で、第４層から縄文時代の石器群に混在して出土した。本来は下位に包含層が存在するものと思われるが、調査期間等の制約から確認するには至らなかった。黒曜石Ｄ製。

(2) 縄文時代の遺物

【石鏃（第７図２～第８図33)】

計32点が出土している。いずれも打製石鏃で局部磨製石鏃は認められない。石質は黒曜石とサヌカイト質安山岩が利用されているが、後者は15と29の２点のみで、他はすべて黒曜石である。ここでは四類に分けて説明する。

１類（２・３）　大形で幅広の一群である。尖頭石器、尖頭状石器、小形尖頭器などの名称で呼ばれることもあるが、ここでは石鏃に含めている。２は全体に丸みを帯び、基部は浅く抉り込まれている。裏面側は丁寧な加工で平坦に仕上げられているが、正面は比較的粗雑で中央には階段状剥離で除去できなかった部分が瘤状に残されている。黒曜石Ｄ製。３は素材剥片の周辺部にのみ二次加工を施したものである。上半部を欠失しているが、２と同様の形態をなすものと思われる。

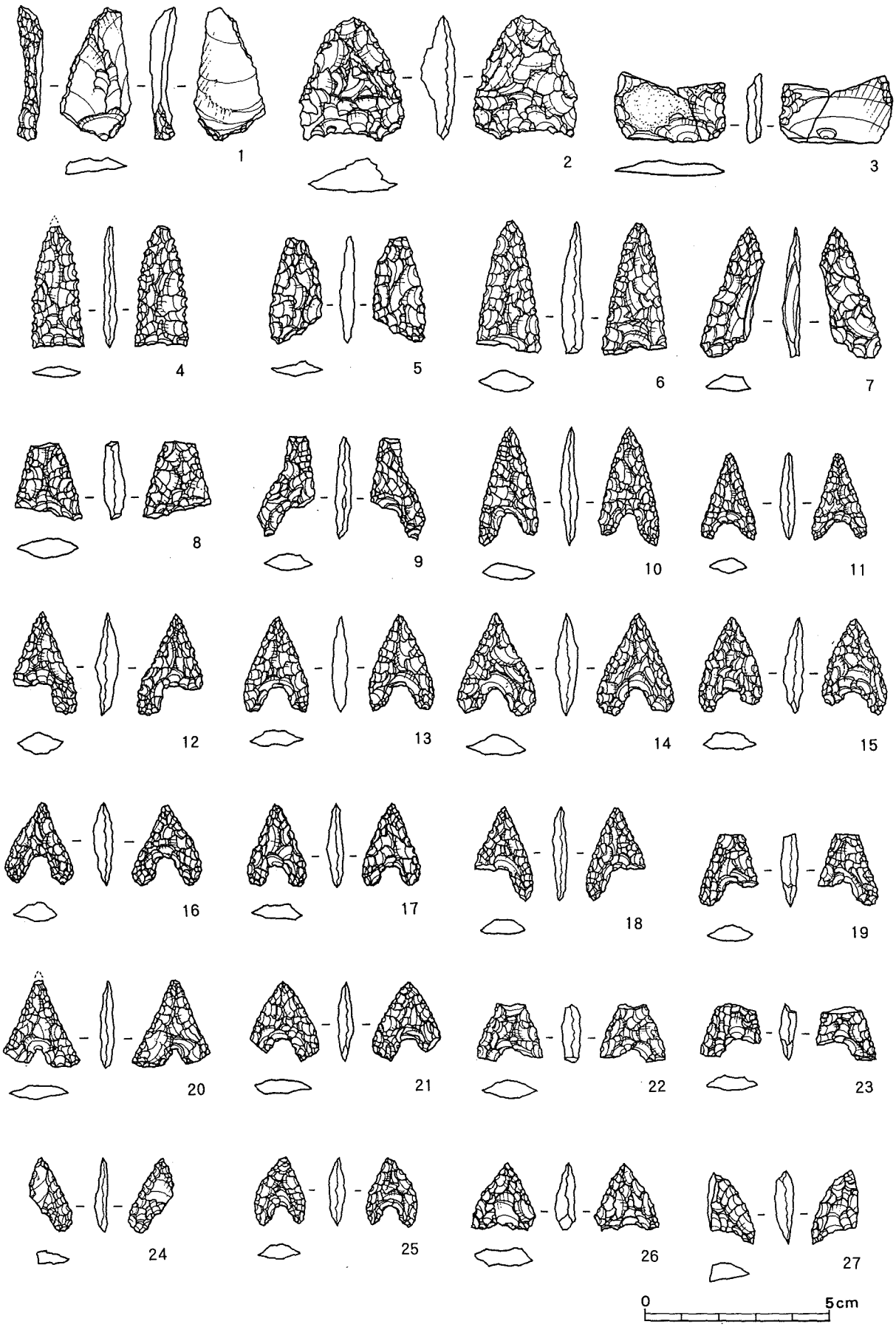
２類（４・５）　幅の倍以上の長さを有し、基部がわずかに内湾するものである。４は丁寧な押圧剥離により薄く仕上げられ、両側辺は鋸歯状を呈する。５は先端部と片脚を欠失するが、細身長身で基部形状も４に近い。両側辺はやや丸みを帯び、鋸歯状の加工は施されていない。黒曜石Ｄ製。

３類（６～30）　比較的深い抉り込みを施すものを一括する。基部形状による分類のため、形態的には様々なバリエーションを含んでいる。６～８は大形肉厚で丁寧な両面加工を施すものである。９は大きく張り出す脚部が胴部で屈曲し、細長い先端部に至る。石鏃全体の中では、やや特異な形状である。10・11は脚端が細く尖るもので、いずれも二次加工は丁寧である。12～25は基部が「逆Ｕ字状」に抉り込まれる点を特徴とする。いわゆる鍬形鏃あるいはそれに類するもので、12・14・16などは典型例と言えよう。総じて小形・幅広のものが多い。28～30は素材の剥離面を残すものである。特に28・30は周辺部のみに小規模な加工が施されており、第７図３との共通性が認められる。

４類(31～33)　過半を欠失するため形状が不明なものを一括する。31は先端部破片、32は胴部破片である。いずれも黒曜石Ａ製で丁寧な二次加工が施されている。33は基部破片である。全形は不明だが、ほぼ直線的な基部を有するものと思われる。黒曜石Ｄ製。

【石鏃未製品（第８図34・35)】

34は比較的厚手の剥片を素材とし、主要剥離面側に粗い二次加工を施したものである。略三角形を呈し、基部にも微細な加工が認められることから石鏃未製品と考えられる。35は横長剥片の周辺部に加工を施したもので、主要剥離面側の下部にはパンチ痕が残されている。基部の抉入を意図したものであろうか。両例とも黒曜石Ｄ製。



第７図　第４層出土石器実測図①（Ｓ＝2/3）

【石錐？（第８図36)】

一側辺にブランティング状の加工を施して尖頭部を作出したものである。素材は正面・裏面ともにネガティブな剥離面であることから、破損あるいは意図的に折断した石核を転用したものと思われる。形状や加工の在り方から石錐と判断したが、二次加工が片側に限られることや磨耗痕が認められないことから他の器種である可能性も否定できない。黒曜石Ｄ製。

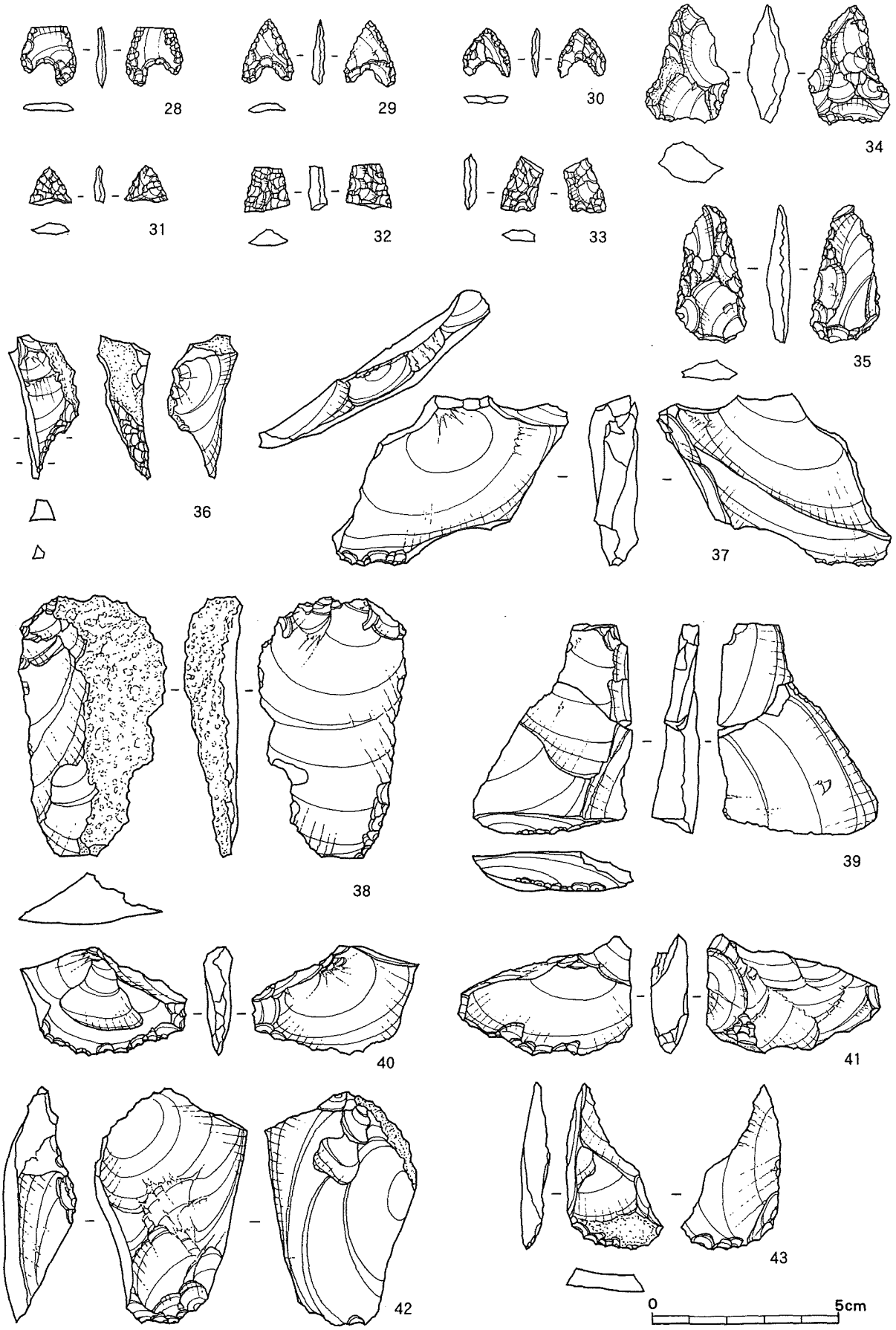
【掻器・削器類（第８図37～第９図47】

計25点が出土した。全体に二次加工が粗雑で小規模な刃部を作出する例が多い。典型的な掻器・削器と呼べるものは少なく、二次加工剥片にすべきかとも思われたが、第12図76のようにさらに微弱な二次加工（２～３回の調整剥離）を施す一群が存在することから、それを二次加工剥片として分離している。37は横長剥片の端部に二次加工を施したもので、石質は極めて緻密である。素材の打面には先行する剥離面のネガティブバルブが残されており、本来は打面再生剥片として剥出されたものと思われる。38は背面に自然面を残すものの整った縦長剥片を素材とし、側辺下位の一部に刃部を作出したものである。39は横長の不定形剥片を折断し、折断面に不規則ながら急角度の加工を施したもので掻器と考えられる。42も厚みのある横長剥片を素材とし、末端に小規模な二次加工が認められる。40・41・43は小形の不定形剥片を素材とする削器である。いずれも二次加工は粗雑で、40・43の刃部は粗鋸歯状を呈する。44は縦長剥片の下端および側辺に一撃による抉りを施したものである。抉入部には微細な剥離痕が認められることから、抉入削器として用いられたものと考えられる。45は図示した中で唯一の黒曜石製で、石核を転用した削器である。最終剥離面のカーブに沿って弧状の刃部が作出されている。46・47は、大形剥片を素材とするものである。いずれも台形状を呈し、底辺に相当する部位に二次加工が施されている。

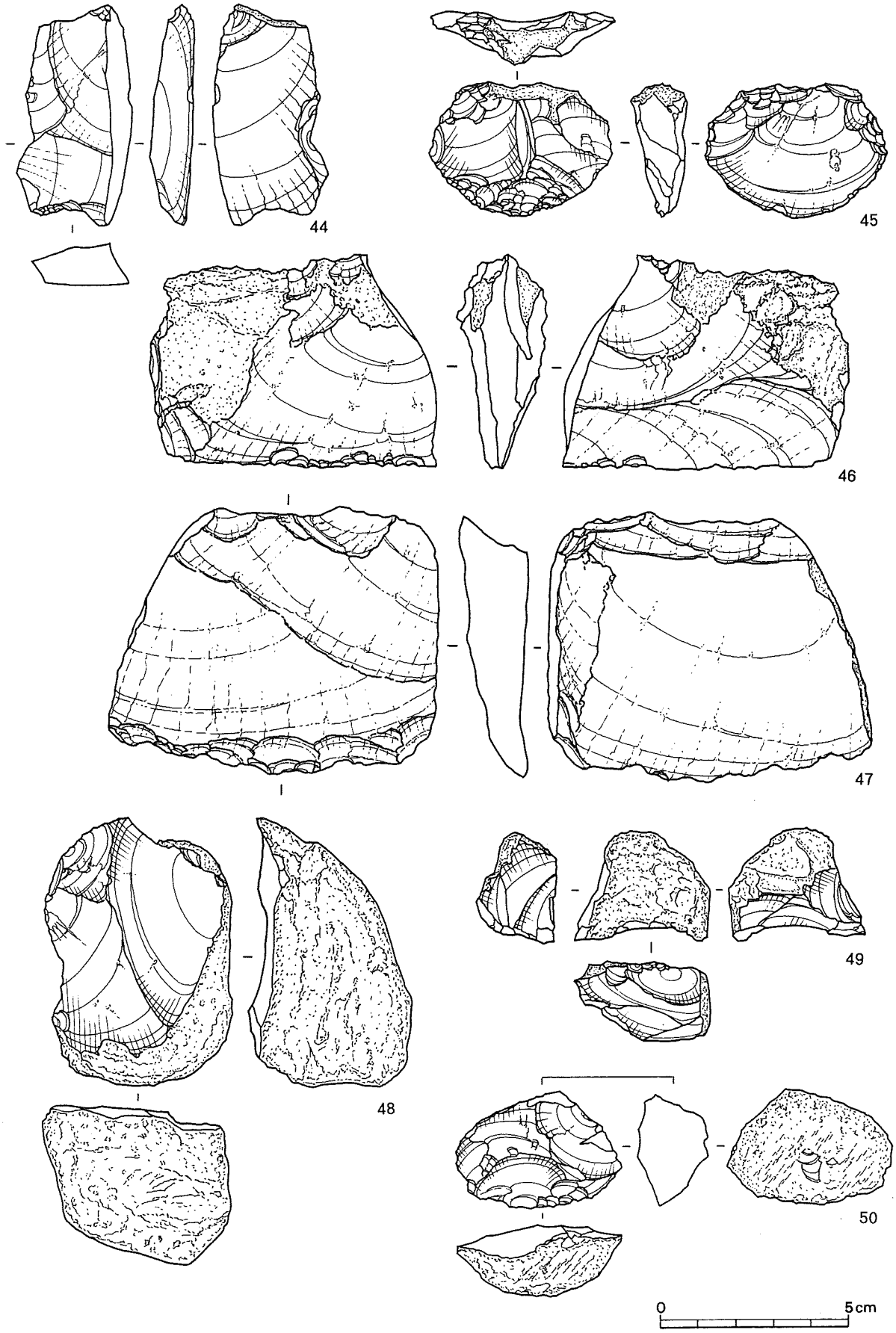
【石核（第９図48～第11図66】

各種の石核が出土しているが、基本的には礫または剥片を素材として多方向からの剥片剥離を実施するもの（Ａ類）、大形厚手剥片を素材とし、主要剥離面に直交する剥片剥離を行うもの（Ｂ類）、比較的扁平で分割面を有するもの（Ｃ類）の三者に大別することができる。

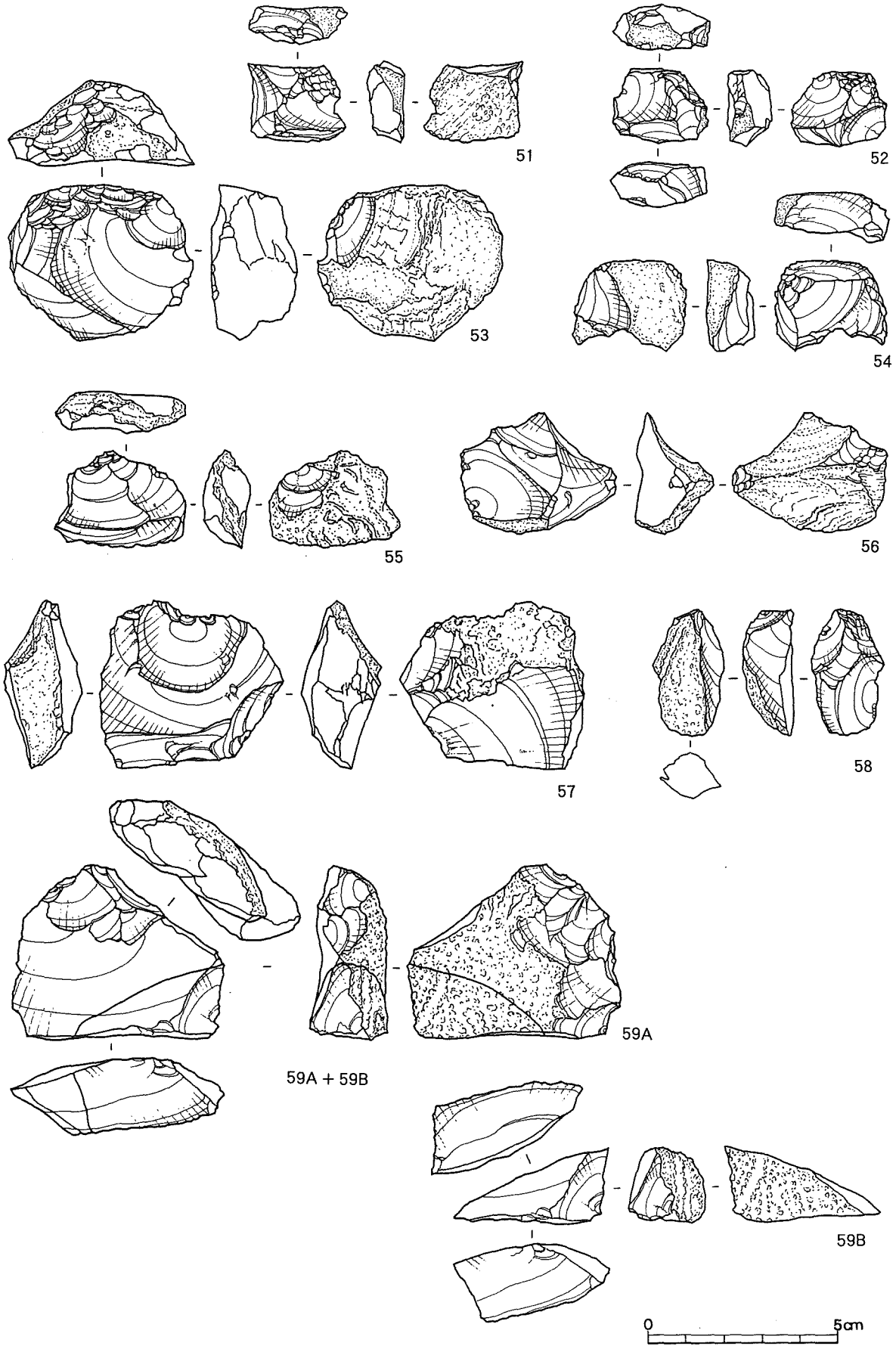
Ａ類石核（第９図48～第10図58）　48は大形の亜角礫を素材とするもので、礫面からの直接加撃により直交する二方向からの剥片面が残されている。黒曜石Ｄ製。49は原礫の平坦部を打面として連続的な剥片剥離を実施するもので、背面および側面にも剥離痕が認められる。多方向からの剥離であるが、すべて自然面からの直接剥離で、先行する剥離面を打面とする剥片剥離ではない。50は卵形の素材に対し側面から礫面を除去するような剥片剥離が行われているものである。51・52・54は極めて小形の石核である。51は背面全体が礫面で覆われているが、図正面左下部にポジ面が残されており、剥片を素材としていることが窺える。52は法量的には51に近いが礫を素材とするもので、両面に多方向からの剥離痕が残されている。残核と呼ぶべき状態であろう。54は黒曜石Ａの角礫を素材とする石核である。図左側上部は分割面で、後述するＣ類石核に分類すべきかも知れない。53～56はいずれも礫を素材としているが、剥片剥離作業は正面に集中し、背面の大半が礫面で覆われるものである。53の



第８図　第４層出土石器実測図②（Ｓ＝2/3）



第９図　第４層出土石器実測図③（Ｓ＝２／３）



第10図　第４層出土石器実測図④（S＝２／３）

正面上部には打面調整と思われる細部加工が施されている。57は大型厚手の剥片を素材とする石核である。正面には大きく主要剥離面が残されており、素材のバルブを除去するような剥片剥離が行われている。58の素材は小型の棒状礫で縦に半割した後、それに直交する方向からの剥片剥離が認められる。以上のＡ類石核はすべて黒曜石製であり、安山岩系石材の利用は見られない。

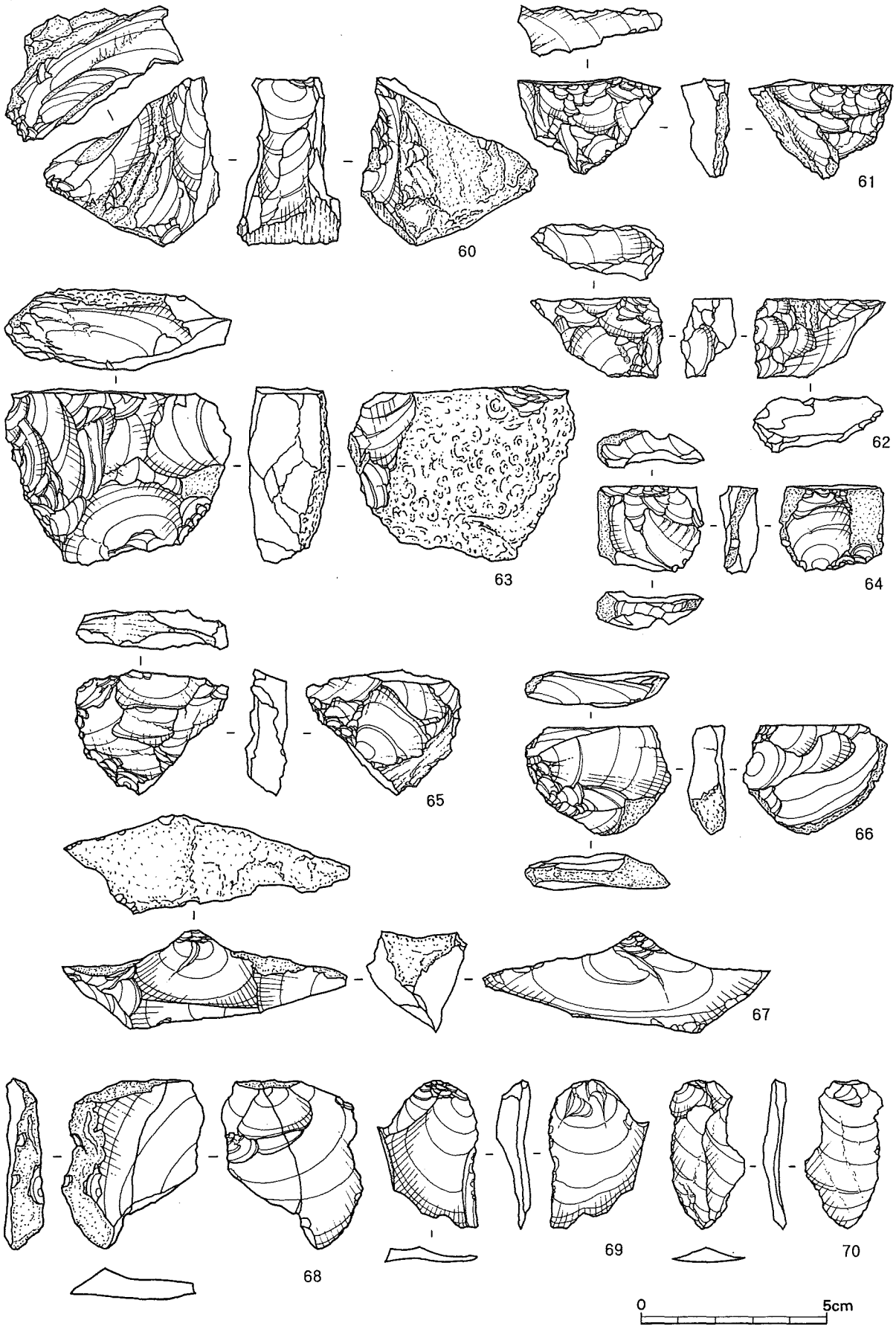
Ｂ類石核（第10図59A＋59B） サヌカイト質安山岩の剥片を素材とする石核に剥片が接合した例である。最初に大形厚手の剥片が用意され、主要剥離面を打面として末端部→頭部方向にかけて打点を左右に移動しながら剥片剥離作業が進行していったことが窺える。剥出された剥片(59B)は断面が二等辺三角形に近い楔形を呈しており、これに先行する剥片も同様の形状をなすものと思われる。最終的な石核には自然面を除去するような二次加工が施されており、削器に転用された可能性がある。

Ｃ類石核（第11図60～66） 比較的扁平で平面概形が三角形または方形を呈し分割面を有する石核である。柏原Ｆ遺跡（山崎・小畑1983)でⅡａ型石核に分類され、形態と技法の特異さから「柏原型石核」と仮称されたものに類似する。計７点出土しているが、石質は65のチャート製を除き、すべて黒曜石が利用されている。60は黒曜石Ａの角礫を素材とし、数回の剥離で礫面を除去した後に分割し、分割面を打面として剥片剥離を行うものである。61は微細な不純物を含む黒曜石Ｂ製で、分割面を打面とする剥片剥離が行われている。62は両面におよぶランダムな剥片剥離の後、縦位方向の加撃によって分割されたものである。分割後の剥片剥離は行われていない。65は淡青緑色チャート製で、節理面と分割面からの剥片剥離が認められる。調査区の端から出土したためか、同一母岩の剥片・砕片類は発見されなかった。以上３例にはポジ面が残されておらず礫素材か剥片素材かは判断できないが、形態や法量上の共通性や両面加工石器を製作するかのような求心的な剥片剥離を行うなど、柏原Ｆ遺跡のⅡａ類石核に酷似する点が多く認められる。63は横位方向の加撃による分割面を有するものである。礫を素材としているが剥片剥離は正面側に集中し、裏面の大半は礫面で覆われている。分割面からの剥離は行われていないが、全体としては60との共通点が多い。64は小型で薄く、上下に縦位からの加撃による分割面を有するものである。63・64ともに黒曜石Ｄ製。66は輪切り状の剥片を素材とするもので、横位からの剥片剥離を行った後、分割されたものである。

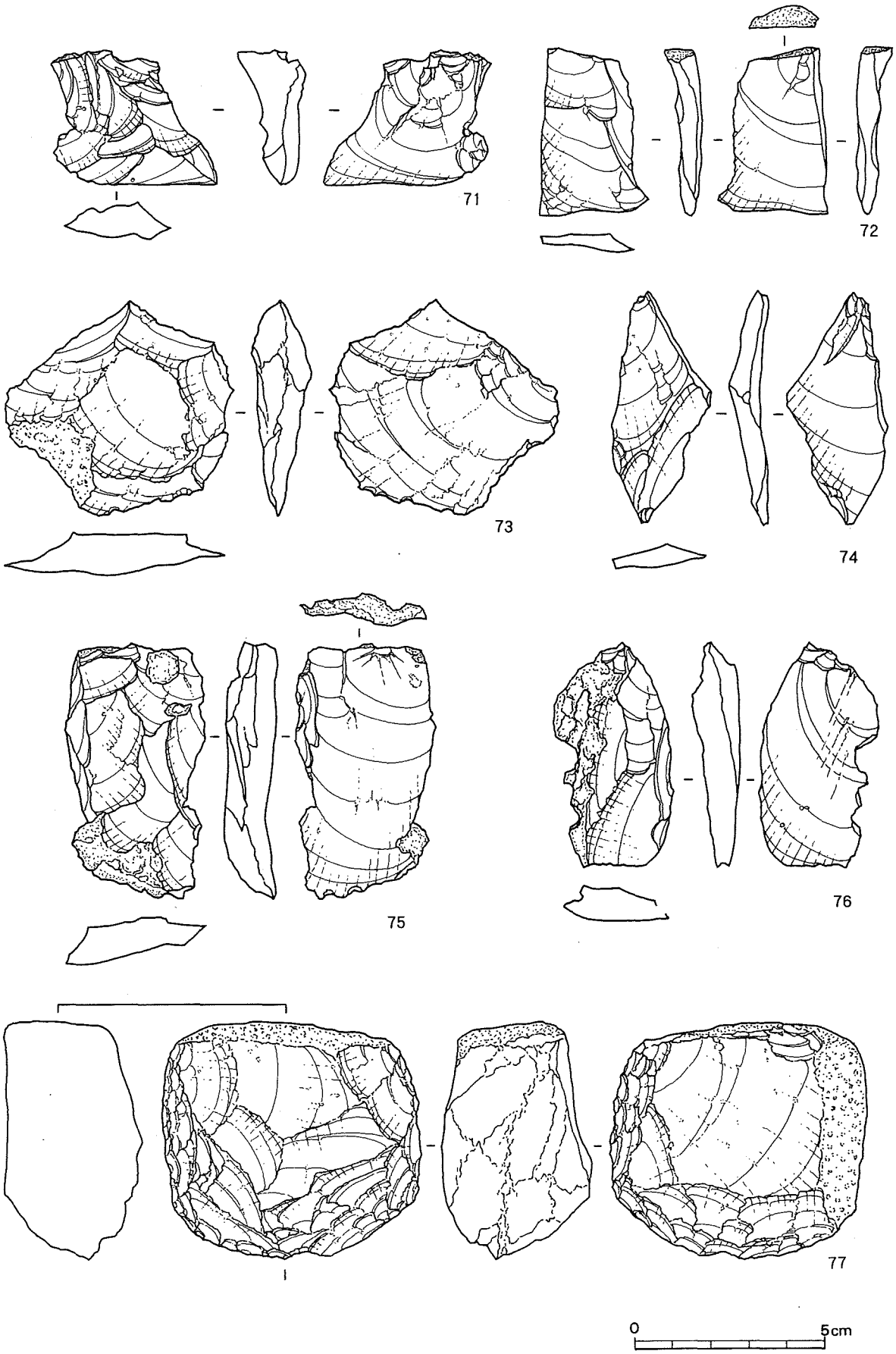
【剥片（第11図67～第12図75、二次加工剥片(76)】

67は自然面打面から剥出された大形の横長剥片である。図正面中央は主要剥離面と同一方向からの剥離痕が、両側には左右からの剥離痕が残されている。極めて良質の黒曜石Ａ製。68・69はやや幅広で不整形の縦長剥片である。68は黒曜石Ｄ製で、背面とは逆方向からの加撃で剥出されている。69は頭部調整を施した例で、打面は稜線状を呈し縁辺部には微細な使用痕が顕著である。67に近似する黒曜石Ａ製。70は細身の縦長剥片である。黒曜石Ａ製。

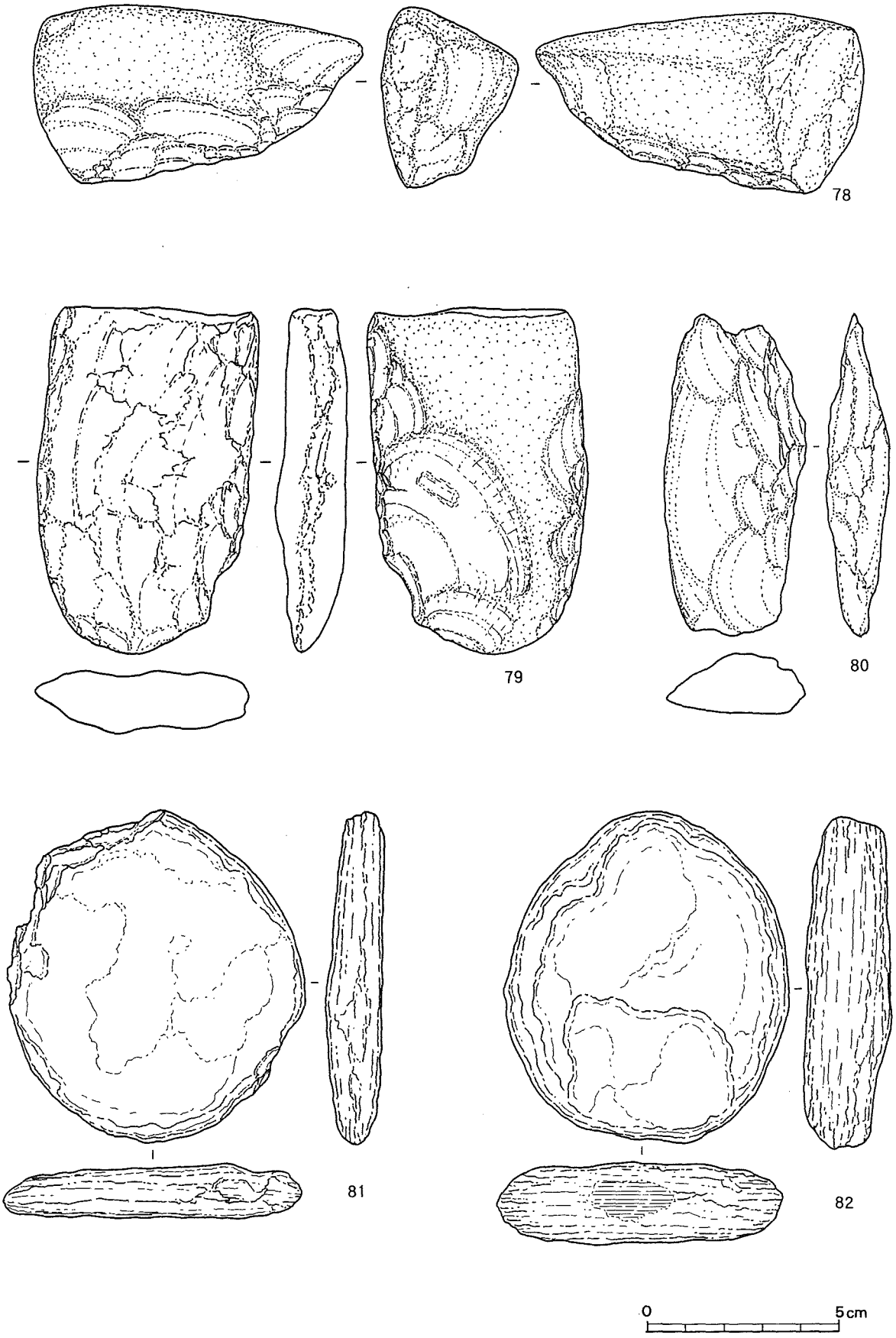
サヌカイト質安山岩製は71・73に代表される不定形剥片が多い。少数ながら72・75のように比較的整った形状の縦長例も存在するが、背面の剥離方向は不定で打面調整も施されていないことから偶然の所産による可能性が強く、縦長剥片を量産する目的的な技法の存在は想定できない。76は主要剥離面側の頭部に小規模な調整加工を施すもので、二次加工剥片の代表例である。



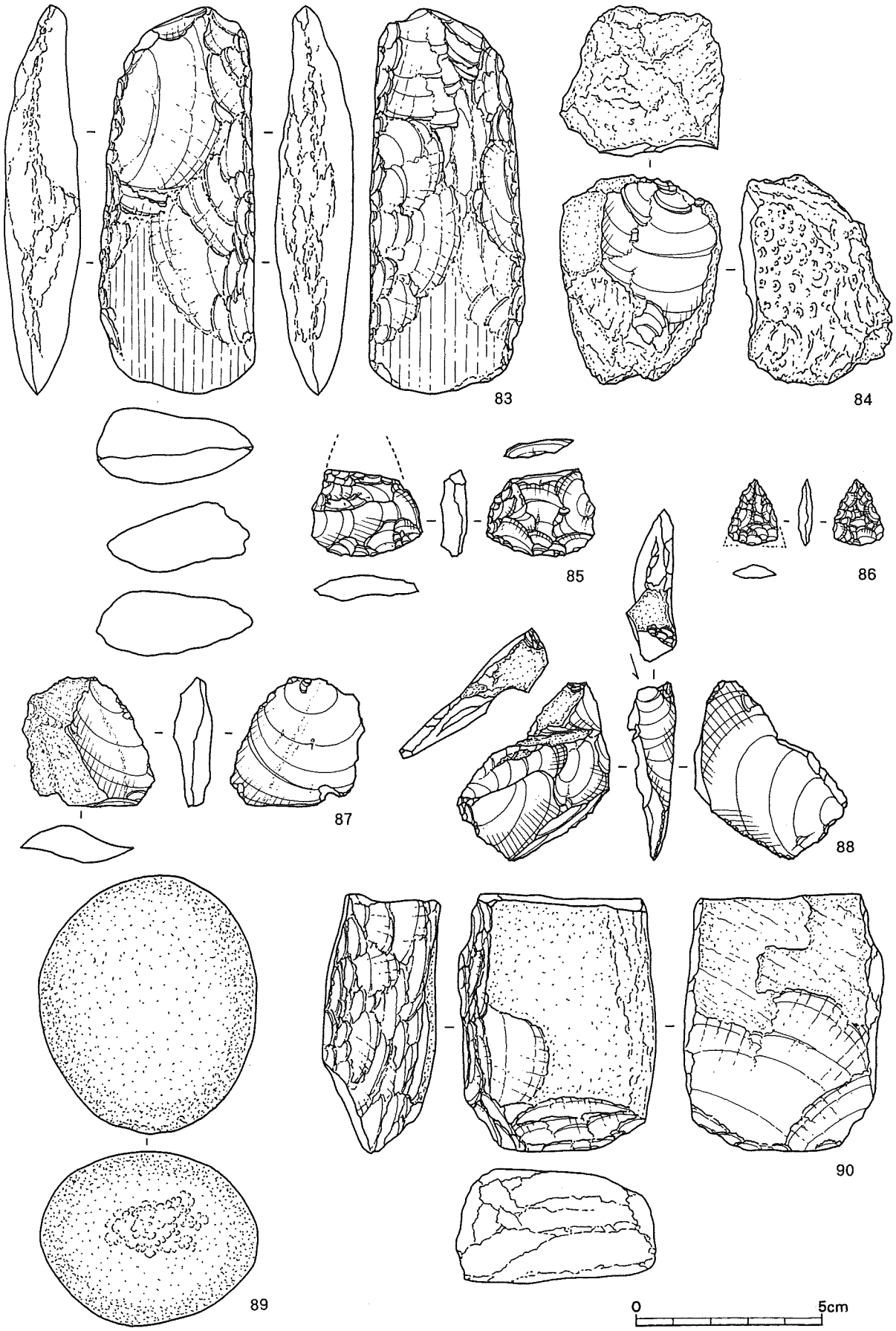
第11図　第４層出土石器実測図⑤（Ｓ＝2/3）



第12図　第４層出土石器実測図⑥（Ｓ＝2/3）



第13図　第４層出土石器実測図⑦（Ｓ＝2/3）



第14図　表土、排上、表面採集の石器実測図（S＝2/3）

【礫器（第12図77～第13図78）】

77は亜角礫を素材とし、図正面は上部以外の三方向から、裏面側は二方向からの加撃が施され、略方形に仕上げられている。石質はやや多孔質だがサヌカイト質安山岩と思われる。78は両面からの加工により刃部を作り出したものである。粗粒の砂岩製で、風化が著しい。

【打製石斧・剥片（第13図79～80）】

79は粗い両面加工を施した打製石斧である。基部を欠損しているが、側辺は平行し刃部は丸みを帯びている。80は78の礫器や79の打製石斧と酷似する粗粒砂岩の剥片で、これらの石器製作に際して生じたものと思われる。

【加工痕を有する礫（第13図81～82）】

80・81は結晶片岩礫の一部に加工痕や磨耗痕が認められる資料である。多良見町伊木力遺跡で類例が報告されているが（松藤1990）、用途は不明である。素材は水磨された扁平礫で、耐風化性の低い石材であることから、遺跡周辺の沢で容易に入手できるものと思われる。

(3) 表面採集および攪乱層出土の石器（第14図83～90）

83は風化が著しく不明瞭であるが、両面からの研磨により刃部を作出した局部磨製石斧である。84は黒曜石D製の石核で、自然面の一部は薔薇状を呈する。打面を作出することなく一枚の剥片を剥出しているが、その段階で留まっていることから石質を確認するための検査的な剥離であった可能性も考えられよう。85・86は石鏃である。85は両面から粗雑な二次加工を施し、外湾する基部を作出している。上半部を欠失しているが、法量や形状の点では第７図２と共通するものである。86は小形三角鏃である。両脚端をわずかに欠いているが、本来は端正な二等辺三角形になるもので、側辺・底辺ともに直線的に仕上げられている。西北九州での初現期石鏃とされる佐世保市泉福寺洞穴第４層の資料（麻生1984)に酷似する。87は黒曜石D製の剥片である。88は彫器である。不定形の剥片を素材として末端部に打面を設定し、そこから彫刀面を作出している。彫刀面に連続する側縁部には刃こぼれ状の使用痕が顕著である。89は水磨礫を利用した敲石である。図正面の下端部にダメージが認められ、他の部位も磨石として利用された可能性が考えられるが、明瞭ではない。90は打製石斧としたが、局部磨製石斧の未製品かも知れない。図正面左側面は急斜な二次加工が施され、平面形・断面形ともに角張った方形を呈する。風化が進んでいるために明瞭ではないが、石質は頁岩と思われる。

（渡邊康行）

【参考文献】

山崎純男・小畑弘己1983『柏原遺跡群Ⅰ　－縄文時代遺跡Ｆ遺跡の調査－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第90集　福岡市教育委員会

松藤和人1990『伊木力遺跡　－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査－』　多良見町文化財調査報告書第７集　多良見町教育委員会

麻生優1984『泉福寺洞穴の発掘記録』　佐世保市教育委員会

第２表　石器観察表①

番　号	注 記 番 号	層位	ｸﾞﾘｯﾄﾞ・出土座標	標高(m)	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
7図1	OH_2_S_146	4層	C3-B・E005/N078	129.922	ﾅｲﾌ形石器	黒曜石D	36	19	7	3.1
7図2	OH_1_S_197	4層	C1-D・N051/E047	130.862	石鏃1類	黒曜石D	33	28	9	5.5
7図3	OH_1_S_218	4層	C1-C・S010/E091	130.998	石鏃1類	黒曜石B	19+α	30	5	2.4
7図4	OH_1_S_383	4層	B1-D・N060/E028	130.811	石鏃2類	黒曜石D	32+α	14	4	1.3
7図5	OH_1_S_129	4層	C1-A・N013/W086	131.068	石鏃2類	黒曜石D	28+α	15	4	1.2
7図6	OH_1_S_444	4層	A2-B・S076/W022	130.729	石鏃3類	黒曜石D	36+α	18+α	6	2.6
7図7	OH_1_S_022	4層	B1-D・S033/E099	131.200	石鏃3類	黒曜石D	35	16+α	5	1.8
7図8	OH_1_S_361	4層	C1-C・N033/E071	130.835	石鏃3類	黒曜石D	21+α	18+α	6	1.8
7図9	OH_2_S_125	4層	C4-A・E026/N044	129.803	石鏃3類	黒曜石D	27+α	15+α	5	1.1
7図10	OH_1_S_238	4層	C1-D・N005/E005	130.966	石鏃3類	黒曜石A	32	17	5	1.5
7図11	OH_1_S_442	4層	B2-A・N056/W006	130.730	石鏃3類	黒曜石D	24	15	4	0.8
7図12	OH_1_S_377	4層	C2-A・N003/E043	130.669	石鏃3類	黒曜石D	28	18+α	6	1.4
7図13	OH_2_S_151	4層	C3-A・W003/S053	129.910	石鏃3類	黒曜石D	26	18	5	1.3
7図14	OH_1_S_004	4層	C1-C・S046/W006	131.207	石鏃3類	黒曜石D	28	21	6	1.9
7図15	OH_1_S_387	4層	B1-D・S013/W045	130.745	石鏃3類	ｻﾇｶｲﾄ	26	18	5	1.6
7図16	OH_1_S_460	4層	B1-D・S044/E099	131.200	石鏃3類	黒曜石A	22	19	5	1.1
7図17	OH_1_S_061	4層	B1-C・N034/W089	131.080	石鏃3類	黒曜石D	22	16	5	1.0
7図18	OH_2_S_114	4層	C3-D・W073/N074	129.739	石鏃3類	黒曜石D	25	16+α	4	0.9
7図19	OH_2_S_056	4層	C3-C・E037/N001	130.120	石鏃3類	黒曜石B	20+α	16+α	4	1.0
7図20	OH_1_S_367	4層	C1-C・S015/E018	130.985	石鏃3類	黒曜石D	24	21+α	4	1.1
7図21	OH_1_S_453	4層	B2-C・S058/E091	130.675	石鏃3類	黒曜石A	22	19+α	4	1.1
7図22	OH_2_S_004	4層	C3-B・W016/N072	130.228	石鏃3類	黒曜石D	16+α	18+α	5	1.2
7図23	OH_1_S_198	4層	C1-D・N063/E052	130.848	石鏃3類	黒曜石A	14+α	15+α	4	0.7
7図24	OH_1_S_344	4層	C1-D・N008/W008	130.880	石鏃3類	黒曜石D	20	12+α	4	0.6
7図25	OH_1_S_352	4層	C1-D・N031/W068	130.768	石鏃3類	黒曜石A	19	14	5	0.8
7図26	OH_1_S_114	4層	C1-C・S010/E030	131.112	石鏃3類	黒曜石B	18	17	6	1.3
7図27	OH_1_S_026	4層	B1-D・N039/E005	131.120	石鏃3類	黒曜石D	20	13+α	5	0.9
8図28	OH_2_S_039	4層	C4-B・W004/N055	130.014	石鏃3類	黒曜石D	16+α	15	3	0.6
8図29	OH_1_S_395	4層	B1-D・N025/W099	130.740	石鏃3類	ｻﾇｶｲﾄ	17	14	4	0.5
8図30	OH_1_S_118	4層	C1-B・N031/W087	131.208	石鏃3類	黒曜石A	13	13	3	0.3
8図31	OH_1_S_161	4層	B1-D・N073/W056	130.973	石鏃4類	黒曜石A	10+α	12+α	3	0.2
8図32	OH_1_S_396	4層	B2-B・N062/E080	130.720	石鏃4類	黒曜石A	12+α	12+α	5	0.7
8図33	OH_2_S_010	4層	C3-A・E012/S028	130.361	石鏃4類	黒曜石D	15+α	12+α	4	0.5
8図34	OH_2_S_092	4層	C3-C・E020/S026	129.911	石鏃未製品	黒曜石D	32	23	11	4.8
8図35	OH_1_S_497	4層	B2-A・N065/W095	130.795	石鏃未製品	黒曜石D	37	19	6	3.3
8図36	OH_1_S_040	4層	C2-B・N047/W049	130.895	石錐?	黒曜石D	39	19	14	6.1
8図37	OH_2_S_096	4層	C3-C・E047/N037	129.945	削器	ｻﾇｶｲﾄ	46	64	14	27.7
8図38	OH_1_S_305	4層	B2-A・N065/W095	130.795	削器	ｻﾇｶｲﾄ	70	40	15	33.1
8図39	OH_2_S_006	4層	C3-B・E040/N064	130.250	掻器	ｻﾇｶｲﾄ	52	43	13	21.3
8図40	OH_1_S_290	4層	B1-C・N023/W012	130.845	削器	ｻﾇｶｲﾄ	30	44	8	6.6
8図41	OH_1_S_337	4層	C1-D・S009/E026	130.935	削器	ｻﾇｶｲﾄ	32	47	10	11.6
8図42	OH_1_S_437	4層	B2-A・N060/E030	130.750	削器	ｻﾇｶｲﾄ	63	42	20	36.8
8図43	OH_1_S_417	4層	B1-C・N012/W050	130.809	削器	ｻﾇｶｲﾄ	45	26	8	5.9
9図44	OH_1_S_408	4層	B2-A・S045/E093	130.774	抉入削器	ｻﾇｶｲﾄ	59	31	12	19.6
9図45	OH_1_S_004	4層	C1-C・S046/W006	131.207	削器	黒曜石D	36	49	15	17.4
9図46	OH_2_S_157	4層	C3-B・W060/N074	129.833	削器	ｻﾇｶｲﾄ	57	77	2	86.0

第3表　石器観察表②

番　号	注　記　番　号	層位	ｸﾞﾘｯﾄﾞ・出土座標	標高(m)	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
9図47	OH_2_S_150	4層	C3-A・W005/S062	129.901	削器	ｻﾇｶｲﾄ	72	87	20	134.5
9図48	OH_1_S_425	4層	B1-C・N068/W037	130.860	石核A類	黒曜石D	72	51	44	154.3
9図49	OH_1_S_020	4層	B1-D・S044/E099	131.200	石核A類	黒曜石D	29	36	22	21.0
9図50	OH_1_S_394	4層	B1-D・N021/W095	130.728	石核A類	黒曜石B	31	45	20	22.4
10図51	OH_1_S_355	4層	C1-C・S055/E043	130.836	石核A類	黒曜石A	22	26	10	5.1
10図52	OH_1_S_424	4層	B1-C・N087/W021	130.875	石核A類	黒曜石A	20	25	12	5.8
10図53	OH_1_S_336	4層	C1-D・S007/E067	130.915	石核A類	黒曜石D	42	49	23	39.9
10図54	OH_1_S_111	4層	B2-C・N093/E040	130.891	石核A類	黒曜石A	24	30	13	7.1
10図55	OH_1_S_038	4層	C2-B・N056/E033	130.965	石核A類	黒曜石D	26	34	12	9.6
10図56	OH_1_S_434	4層	A1-D・S050/W074	130.876	石核A類	黒曜石B	32	41	21	16.9
10図57	OH_1_S_212	4層	C1-C・S063/E073	130.957	石核A類	黒曜石D	45	48	21	37.0
10図58	OH_2_S_312	4層	C4-A・E054/N046	129.707	石核A類	黒曜石D	34	20	14	8.6
10図59A	OH_2_S_153	4層	C3-A・W043/S091	129.870	石核B類	ｻﾇｶｲﾄ	46	56	18	42.2
10図59B	OH_2_S_103	4層	C3-D・W025/N020	129.783	剥片	ｻﾇｶｲﾄ	21	41	21	12.7
11図60	OH_1_S_192	4層	C1-B・N091/W091	131.063	石核C類	黒曜石A	45	47	28	36.7
11図61	OH_2_S_201	4層	C3-B・W071/N010	129.708	石核C類	黒曜石B	26	39	14	13.1
11図62	OH_1_S_078	4層	C2-C・N039/E085	130.920	石核C類	黒曜石A	22	35	15	8.5
11図63	OH_1_S_451	4層	B1-C・S058/E091	131.080	石核C類	黒曜石D	47	61	22	62.3
11図64	OH_1_S_080	4層	B1-D・S019/E088	131.080	石核C類	黒曜石D	23	29	11	6.4
11図65	第5試掘坑	4層			石核C類	ﾁｬｰﾄ	34	41	11	10.2
11図66	OH_2_S_275	4層	C4-A・E094/N044	130.010	石核C類	黒曜石B	29	39	11	8.3
11図67	OH_1_S_407	4層	B1-C・S053/W058	130.745	剥片	黒曜石A	27	76	27	23.9
11図68	OH_1_S_479	4層	C1-A・S094/W099	130.957	剥片	黒曜石D	46	38	11	13.8
11図69	OH_1_S_364	4層	C1-C・N005/E004	130.980	使用痕剥片	黒曜石A	40	27	9	4.6
11図70	OH_1_S_126	4層	C1-C・S077/E097	131.185	剥片	黒曜石A	40	21	6	2.6
12図71	OH_2_S_120	4層	C4-A・E083/N010	129.705	剥片	ｻﾇｶｲﾄ	36	45	18	13.6
12図72	OH_2_S_203	4層	C3-B・W094/N015	129.825	剥片	ｻﾇｶｲﾄ	44	28	10	8.6
12図73	OH_1_S_406	4層	B1-C・S066/W057	130.750	剥片	ｻﾇｶｲﾄ	58	60	16	37.7
12図74	OH_2_S_178	4層	C3-A・W054/N041	129.809	剥片	ｻﾇｶｲﾄ	61	26	11	8.2
12図75	第5試掘坑	4層			剥片	ｻﾇｶｲﾄ	67	37	14	32.1
12図76	OH_2_S_207	4層	C3-D・E072/N003	129.750	剥片	ｻﾇｶｲﾄ	59	32	13	17.0
12図77	OH_1_S_252	4層	C1-D・N061/E071	130.953	礫器	ｻﾇｶｲﾄ	63	68	39	217
13図78	OH_1_S_046	4層	C2-A・S015/W043	131.043	礫器	砂岩	48	87	36	147.3
13図79	OH_2_S_189	4層	C3-C・E061/S042	129.758	打製石斧	砂岩	90	57	18	114.4
13図80	OH_2_S_009	4層	C3-A・E009/S047	130.226	礫器剥片	砂岩	84	37	17	52.5
13図81	OH_1_S_035	4層	C1-A・N056/W063	131.209	片岩礫	結晶片岩	87	78	15	126.2
13図82	OH_1_S_441	4層	B2-A・S005/E020	130.755	片岩礫	結晶片岩	86	75	23	206.4
14図83	第3試掘坑	不明			局部磨製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	104	42	21	107.8
14図84	表面採集	不明			石核	黒曜石D	57	44	41	108.1
14図85	表土中	不明			石鏃	黒曜石D	24+α	29	8	4.5
14図86	表面採集	不明			石鏃	黒曜石D	18	14+α	4	0.7
14図87	表面採集	不明			彫器	黒曜石A	48	41	13	15.1
14図88	表面採集	不明			剥片	黒曜石D	35	36	10	9.1
14図89	表土中	不明			敲石	輝石安山岩	70	59	47	263.9
14図90	排土中	不明			打製石斧	頁岩	70	54	32	170.3

※　サヌカイトは、サヌカイト質安山岩を表す。

Ⅵ. 考　察 －石器群の特徴と編年的位置に関する二、三の問題－

1．はじめに

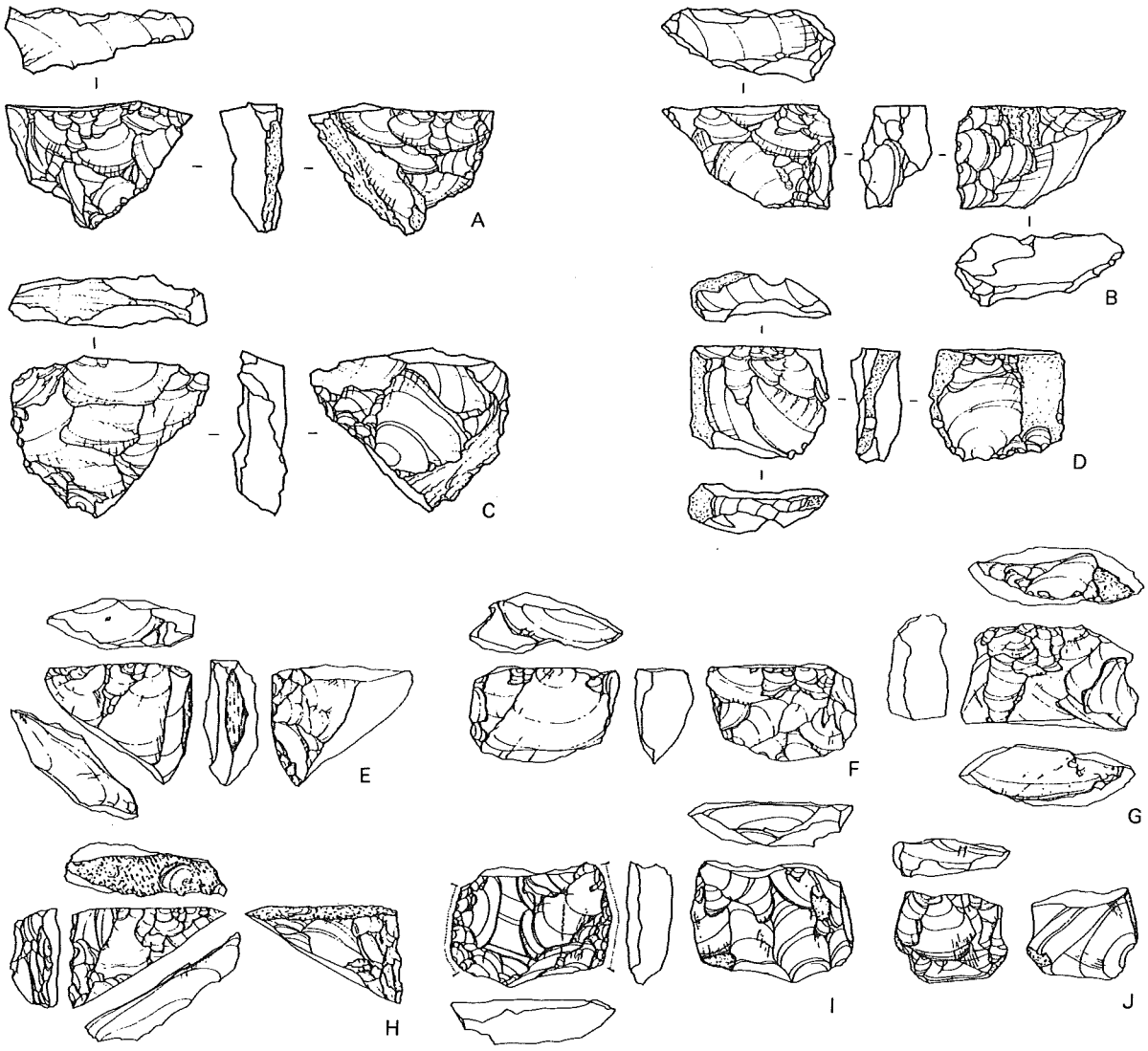
広平遺跡では、打製石鏃と掻器・削器類を主体とし、これに多量の石核・剥片・砕片を伴う石器群が出土した。土器は発見されなかったが、層位的には大半が第４層に属するものであり、比較的限定された時間内の所産と考えて大過ないものと思われる。具体的には打製石鏃に鍬形鏃が含まれることや柏原型石核の存在から縄文時代早期の石器群である可能性を想定しうるが、土器資料の裏付けを欠くため断定の域には至らない。よって本稿では石核や石鏃の特徴、および欠落器種の問題を通して本石器群の編年上の位置を検討してみたい。

2．Ｃ類石核と「柏原型石核」の類似

剥片・砕片の石材は、大部分が黒曜石とサヌカイト質安山岩である。前者は剥片類に対応する量の石核が存在するが、サヌカイト質安山岩の石核は極めて少なく、素材獲得の在り方が大きく異なっていたことを示している。接合資料を欠くため剥片剥離技術には言及できないが、両石材とも礫面あるいは先行する剥離面を利用しながら頻繁に打面転移を繰り返すものが多く、打面調整を施す例は皆無に近い。このため結果的に得られる剥片は不定形を呈し、背面の一部に礫面を残すものも少なくない。こうした在り方は西北九州の縄文時代遺跡において普遍的に見られるもので、時期決定の要素となりうる事象ではない。しかし石核の中には極めて特異な技法を有するもの（Ｃ類石核）が認められ、これは福岡市柏原Ｆ遺跡で早期土器に共伴することが確認された柏原型石核に類似するものである。以下、柏原Ｆ遺跡の報告書（山崎・小畑1983)の記述を引用しつつ、両者の形態や技法上の共通点と相違点に触れておこう。

柏原Ｆ遺跡では石核を、礫素材（Ⅰ類・Ⅲ類）と剥片素材（Ⅱ類）とに大別し、さらにⅡ類石核をａ～ｄ類に細分している。このうち「扁平な板状の長方体を呈し、大きさは３×5cm程である。素材に剥片を利用し、両面加工品を製作するような工程で剥片剥離を行う。分割面をもつことが多い」という特徴を有するものをⅡａ類とし「柏原型石核」と称している（第15図Ｅ～Ｊ）。

一方、第15図Ａ～Ｄに代表される本遺跡のＣ類石核は、①平面概形が三角形または方形を呈し、扁平であること。②分割面を持ち、それを打面とする剥片剥離が行われていること。③求心的な剥片剥離が実施されていること。④石材として黒曜石が利用されていること、の諸点で柏原Ｆ遺跡Ⅱａ類石核との共通性が認められる。ただし柏原Ｆ遺跡例が剥片素材であるのに対し、本遺跡では明確に剥片素材と認定できるものが少なく、むしろ礫素材である可能性が高いことは大きな相違である。また分割面も柏原Ｆ遺跡Ⅱａ類石核の多くが主軸に直交する方向からの加撃であるのに対し、本遺跡例は主軸に平行する加撃が主体を占めている。石材に関しても柏原Ｆ遺跡で安山岩の利用が見られるのに対し、本遺跡では同石材を用いたＣ類石核が見いだせなかった。このように多少の相違はあるものの、基本的に広平遺跡Ｃ類石核と柏原Ｆ遺跡Ⅱａ類石核とは共通する要素が多く、両者は極めて近似した剥片剥離技術として理解しうる。その分布は「Ⅱａ類石核については僅かではあるが長崎県岩下洞穴、鷹野遺跡、百花台遺跡、福岡県深原遺跡で類例が知られる」と述べられており、最近では熊本県狸谷



第15図　広平遺跡のＣ類石核（Ａ～Ｄ）と柏原Ｆ遺跡のⅡａ類石核（Ｅ～Ｊ）（S=2/3）

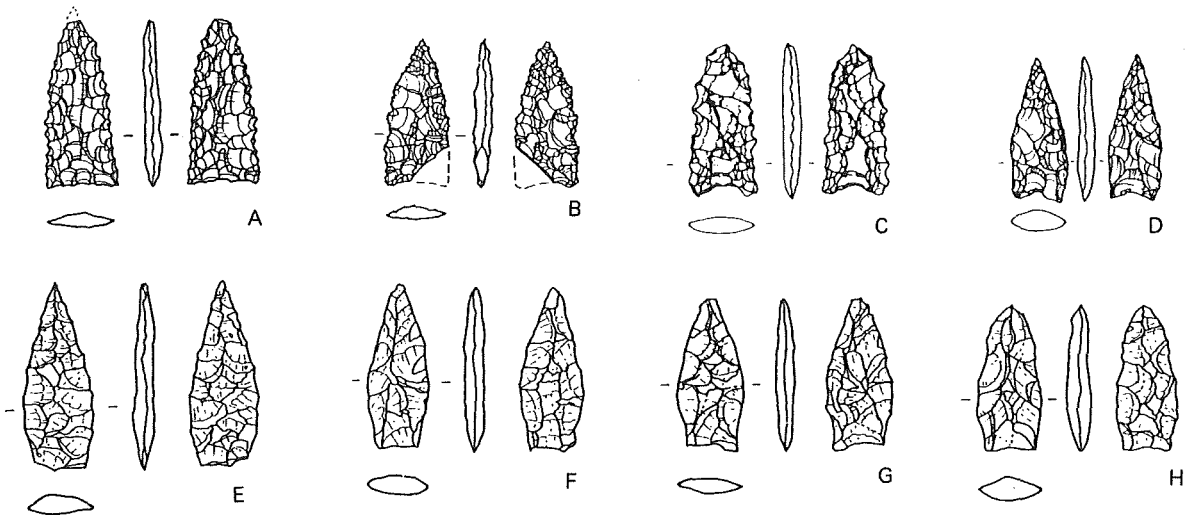
遺跡からも類例が報告されている（木崎1987）。このようにⅡａ類石核の類例は、長崎県を含む西北九州～中九州に分布することが明らかで、形態的・技術的類似性から広平遺跡Ｃ類石核≒柏原型石核と捉えて大過ないものと思われる。柏原Ｆ遺跡では編年的位置について「Ⅱａ類の大半とⅡｃ類石核はいずれもⅡ層に含まれ、おおよそ縄文時代早期中～後葉に比定される。これは他遺跡の所見とほぼ一致している」との見解が示されている。一方、大村湾南岸に所在する多良見町伊木力遺跡において縄文早期～晩期の石器組成と剥片剥離技術の変遷を明らかにした松藤和人氏は、石核の形態分類を示しているが（松藤1990）、柏原Ｆ遺跡Ⅱａ類石核に該当するものは含まれていない。ここでは早期について「点数が少なく、本来の石器組成を十分回復しているかどうか…」と消極的に扱われているが、前期以降の豊富な資料中にⅡａ類石核が見られず、それは前期轟Ｂ式段階以降に生活の場として利用される他の海浜部立地遺跡でも同様である。このことはⅡａ類石核の年代的な下限を示すものとして注目すべきであり、早期中～後葉に位置づけられた柏原Ｆ遺跡での所見を裏付ける事象と言える。

3．打製石鏃について

主体をなすのは基部を深く抉り込み、明瞭な脚部を作出する一群（第３類）である。なかでも第７図12に代表されるような「逆Ｕ字状」の抉りを施すものは鍬形鏃と呼ばれ、縄文早期に特徴的な石鏃としての認識が定着している。しかし詳細に観察すれば、脚端が直線的なもの（第７図20)、丸みを帯びるもの（第７図15・17ほか）、尖り気味のもの（第７図25)などに細分可能で、抉入部の形状も「逆Ｕ字状」のみならず「Ｖ字状」（第17図20)や「半円状」（第17図11)などの小異が認められる。これら全てを鍬形鏃として包括的に扱うことは適切でないが、そもそも鍬形鏃という名称自体が曖昧な部分を含んでいるために、厳密な意味で鍬形鏃のみを分離することも困難である。たしかに鍬形鏃は縄文早期を代表する石鏃の一つではあるが、該期の石鏃形態が鍬形鏃に限定されるわけではなく、多様なバリエーションがあることは多くの調査例から明らかである。第３類石鏃の細別を避けたのは以上のような理由によるが、全体としての規格性は強く、鍬形鏃あるいはそれに類するもの含む一般的な縄文早期の石鏃群に近似する資料と言えよう。なお前節で触れた柏原型石核について報告書では（この技法により）「打瘤部の厚みの少ない薄い幅広の剥片を生産することが可能となった。この種の剥片は石鏃などの小型剥片石器の素材として利用されており、合理的な剥片剥離技術であったことが解る」と評価しているが、第８図28～30のように小形で素材の剥離面を残す石鏃も該期に散見されることが多く、柏原型石核から生産された剥片との関連が考えられる。

第１類とした大形石鏃も、早期の遺跡から出土する例が多い。もちろん早期以外の時期、たとえば晩期にも類品があり一概に早期の所産と断定することはできないが、福岡県深原遺跡で押型文土器に伴うことが確認されており（木下ほか1978)、県内でも佐世保市岩下洞穴第Ｖ層（麻生1968)や吾妻町弘法原遺跡（高野ほか1983、1992)での類例は押型文土器段階の所産と見られることから、これも該期の特徴的な石器と考えられる。

第２類石鏃の中で、第16図Ａ（第７図４と同一）は際立って特徴的である。この種の石鏃は、従来あまり注意されることはなかったが、いくつかの遺跡に類例を見ることができる（第16図参照）。Ｂは大村市上八竜遺跡（伴1991)、Ｃ～Ｄは諫早市牛込Ａ・Ｂ遺跡（福田ほか1982)の出土資料である。いずれも細身で長幅比がおおむね２対１以上を示しており、基部が浅く抉り込まれ、丁寧な調整加工により薄く仕上げられる点で共通する。このうち上八竜遺跡例の時期は明らかでないが、牛込Ａ・Ｂ遺跡例は伴出した土器から早期の所産と考えられる。また上記の諸例とは若干異なるが、東彼杵町大久保遺跡出土の石鏃も近似例として注目すべきものである（第16図Ｅ～Ｈ）。報告者の藤田和裕氏は「特異な形の石鏃」として他の「通有の石鏃」とは異なることを指摘し、類例を参考資料として掲げた上で「断定はできないが、形の似たものが、縄文時代早期から前期の遺跡から出土しているという事実と、それらは通有の石鏃に、わずかの数が混って出土している」と述べている（藤田1991)。大久保遺跡の「特異な形の石鏃」には基部が直線的なものと浅く抉り込まれるものとの二者が認められるが、いずれも最大幅が基部ではなく胴部中央よりやや下位にあり「柳の葉の付け根を切り取ったような形」を呈する点に最大の特徴がある。同様の石鏃がまとまって出土した例は長崎県内では大久保



第16図　広平遺跡の第２類石鏃（Ａ）と類似資料（Ｂ～Ｈ）（S=1/1）

遺跡以外に見当たらず、ここでは便宜上「大久保型石鏃」と仮称しておく。報告書では「この種の石鏃の系統として考えられるのは、ポイントからの流れである」としており、理由として石材に安山岩が多用されることや細身長身であること、ポイントとの形態的な類似をあげている。この遺跡は層位的な攪乱を受けているため旧石器時代のナイフ形石器、台形石器、細石刃（報告書では剥片とされる）と混在した形で出土しており、少数ながら縄文晩期の土器が確認されているが、局部磨製石鏃や小形三角鏃なども見られることから、石鏃を中心とする石器群の多くは縄文早期の所産である可能性が高いものと思われる。この「大久保型石鏃」を本遺跡例や参考資料として図示した上八竜遺跡例、牛込Ａ・Ｂ遺跡例と同一視できるかについては資料の増加を待って検討すべき余地を残しているが、丁寧な調整によって薄手長身の形態を作出し、独特の基部形状を有するなどの共通性から、早期に特有な石鏃の一形態になる可能性を想定しうるものであり、逆説的に広平遺跡の石鏃が該期に帰属する可能性を示唆しているとも言えよう。

４．局部磨製石鏃と石匙の欠落

局部磨製石鏃と石匙は全く出土しなかったが、皆無という事実もまた編年的位置を考える上で重要な意味を持っている。局部磨製石鏃については昭和20年代から東日本の縄文早期遺跡での出土例が知られており、その後の研究で鍬形鏃に先行することが指摘されていた（上野1962）。九州では佐世保市岩下洞穴の調査によって良好な資料が得られ、やはり早期に伴うことが確認された（麻生、前掲）。ここでの発見は局部磨製石鏃の中心域が西北九州にあるのではないか、と思われるほどの膨大な量で、昭和47年には下川達彌氏によって詳細な分析が行われた（下川1972）。今日では発掘調査の急増とともに分布域の拡大が確認され資料も充実しつつあるが、積極的な考察が試みられることは少なく、基本的な所見に関しては未だに下川氏の論考に負うところが大きい。県内では諫早市の中核工業団地や九州横断自動車道建設に先立つ多くの調査が実施された結果、県北地域のみならず諫早平野に至るまでの大村湾東岸一帯に広く分布することが確認され、東彼杵町松山Ａ遺跡では393点もの局部磨製石鏃が出土して注目を集めた（安楽1989）。

こうした一連の調査から、少なくとも大村湾東岸における局部磨製石鏃の分布は県北部に濃厚で、南下するにつれて次第に稀薄になることが指摘されているが（安楽、前掲）、県内全域について論じるには資料不足の感が否めない。ここでは上記以外の地域について概観し、広平遺跡の所在する西彼杵半島が局部磨製石鏃の分布圏に含まれるかどうかを検討しておきたい。

島嶼部のうち、対馬については縄文早期の遺跡が少ないこともあって該期の実態は不明な点が多く、確実な報告例はないようである。壱岐の原の辻遺跡では、基部両面を軽く研磨した局部磨製石鏃が報告されているが(安楽ほか1978)、時期は不明である。五島列島では押型文土器を出土する早期遺跡として、小値賀町目崎遺跡・ハモキ遺跡、岐宿町茶園遺跡、富江町野坑遺跡・黒瀬遺跡、福江市皆塚遺跡の６か所が知られており、このうち目崎遺跡では「部分的に研磨した小型の石鏃」が報告されている(塚原1996)。伴出土器から考えて、早期の局部磨製石鏃であることは確実であろう。このほか岐宿町寄神貝塚周辺遺跡採集遺物の中にも胴部を研磨した局部磨製石鏃が見られる（小野ほか1990)。

島原半島は数多くの発掘調査が実施されている地域であり、主に北部から東部にかけて約60か所の縄文早期遺跡が確認されている(久原1988)。なかでも吾妻町に所在する弘法原遺跡は押型文土器の単純遺跡として著名であるが、数次の調査で多量の石鏃が出土しているにもかかわらず、局部磨製石鏃は未発見である(註2)。また島原市畑中遺跡(安楽ほか1994)や有明町一野遺跡(高野ほか1992)では条痕文円筒形土器がまとまって出土しているが、いずれも局部磨製石鏃は見当たらない。現時点では島原市肥賀太郎遺跡（伴ほか1990)と国見町百花台遺跡(村川ほか1994)で局部磨製石鏃が報告されているが、前者は縄文晩期を主体とする包含層からの出土であり、後者も早期の所産とは断定できない資料である(註3)。半島全体の遺跡数や調査密度からすると極めて稀薄な分布であると言わざるを得ない。

広平遺跡が所在する西彼杵半島の状況はどうであろうか。この地域では西海町ケイマンゴー遺跡での報告例(福田ほか1980)があり、最近では長崎市柿泊遺跡Ｅ地点で縄文早期の石器群が検出されている。ここでは打製石鏃とともに多数の局部磨製石鏃が発見されているが、鍬形鏃は少数である(註4)。調査例が少ない西彼杵半島の、いわば南北両端に位置する二遺跡のみをもって分布を論じるには多少の躊躇を感じるが、少なくとも柿泊遺跡のように一定量の局部磨製石鏃を出土する遺跡が存在することや、西彼杵半島の南側に位置する長崎半島でも野母崎町脇岬遺跡や三和町坂口遺跡での採集資料が報告されていることから(下川1983)、これらの地域も局部磨製石鏃の分布圏内と見なすことができる。

さて局部磨製石鏃は、鍬形鏃とともに縄文早期の代表的な石鏃とされ、両者には時間差があることも指摘されてきた。今日では局部磨製石鏃の共伴土器に関する資料の蓄積も進み、その初現と終焉についても次第に解明されつつある。とりわけ柏原Ｆ遺跡での成果は特筆すべきであろう。ここでは縄文早期の三枚の文化層が把握され、石鏃の変遷と共伴土器が明らかにされた(山崎・小畑、前掲）。報告書によれば「Ⅲ層における局部磨製石鏃の隆盛、Ⅱ層における鍬形鏃、三角形鏃の隆盛、局部磨製石鏃の減少、Ⅰ層における鍬形鏃の減少」と整理され、「局部磨製石鏃が撚糸文土器、刺突文土器、条痕文土器の時期から押型文土器(稲荷山～下菅生Ｂ式)に、鍬形鏃が主に押型文土器（稲荷山～

田村式）に対比できる」と述べられている。

長崎県内の開地遺跡は良好な包含層に恵まれることが少なく、土器も遺存状態の悪い場合が多いが、柿泊遺跡Ｅ地点では無文土器の共伴が確認されているし、最多の出土量を誇る松山Ａ遺跡でも無文土器のみが出土している。いずれも厚手で押型文土器が見られないことから押型文土器に先行する無文土器（橘1984)の可能性が強い。牛込Ａ・Ｂ遺跡では円筒形条痕文土器、押型文土器、平栫・塞ノ神式土器の三者が分布を異にして出土しているが（福田ほか、前掲）、今回これに石鏃の分布を照合した結果、おおむね局部磨製石鏃と円筒形条痕文土器の分布域が一致し、押型文土器の分布域には局部磨製石鏃の見られないことが判明した。以上のことから局部磨製石鏃は、一部が押型文土器段階まで残存する可能性があるものの、その隆盛期は撚糸文土器、刺突文土器、無文土器、円筒形条痕文といった押型文土器に先行する時期である可能性が高く、押型文土器の中でも古い段階には次第に衰退して鍬形鏃に交代していったものと考えられる。

次に石匙の欠落について触れておきたい。全国的に見た場合、石匙は縄文早期後半に出現・普及するとされ（鈴木1981など）、これは九州においても例外ではないようだ。西北九州の石匙を論じた橘昌信氏は福岡県深原遺跡での成果（３層：田村式期、４層：早水台式期）に注目し、13点の石匙がすべて３層から出土していることから「西北九州での石匙の初現は、早期後葉の押型文土器群に求めることができる」とし、大分県早水台遺跡出土の豊富な石器群の中に石匙を見いだせないことや同県稲荷山遺跡・川原田洞穴・田村遺跡・政所馬渡遺跡等での層位的事実や共伴関係の事例を傍証として「深原遺跡の石匙を初現とみなすことができる」と述べている（橘1980)。深原遺跡例が西北九州での最古かどうかはともかく、石匙が押型文前半段階には見られず田村式以降に出現するという指摘は重要で、その後の調査成果も同氏の見解を追認する事実が多い。いくつかの具体例を見てみよう。

柏原Ｆ遺跡の場合、石匙はⅠ・Ⅱ層から出土しているがⅢ層には認められず、柿泊遺跡Ｅ地点でも石匙は発見されていない。いずれも局部磨製石鏃の隆盛期に石匙が出現していない可能性を示す好例である。松山Ａ遺跡では局部磨製石鏃を含む約2500点もの膨大な石鏃が出土しているにもかかわらず石匙は１点に過ぎない。一般的解釈としてではあるが、狩猟具と解体処理具という両者の密接な関連性からすれば、いかにも過小である。諫早市鷹野遺跡はＡ・B2地点からなりⅡ層、Ⅲ層が縄文早期の包含層である[注5]。ここではＢ地点Ⅲ層→Ｂ地点Ⅱ層(→？)Ａ地点Ⅱ層という先後関係が想定され(伴1986)、Ａ地点で石匙９点が出土しているのに対し、Ｂ地点では皆無であったと報告されている。こうした事例は逆に、早期後半～終末に比定される平栫・塞ノ神式土器や新段階の押型文土器に伴って石匙が多く発見されることとも符合しており、橘氏の見解を裏付ける強力な補完事象と言える。

以上述べてきたように、局部磨製石鏃と石匙の有無は縄文早期の石器群を検討する上で重要な要素であり、広平遺跡の編年的位置を考えるに際しても有力な手がかりとなる。これらの前提を踏まえた上で、本稿の目的に言及しておきたい。

５．結語　－広平遺跡石器群の編年的位置－

打製石鏃に関しては、鍬形鏃とその類似形態が主体を占めること、それ以外の形態についても早期

に特徴的なものが認められることから、縄文早期に位置づけられる可能性を指摘できる。さらに西彼杵半島を分布圏内と見なせるにも関わらず局部磨製石鏃が発見されない事実から、石鏃製作における研磨技法が衰退し、新たな形式としての鍬形鏃が出現した段階としての編年的位置を示していると考えることができる。このことは、柏原F遺跡において鍬形鏃の隆盛期であるⅡ層に特徴的な柏原型石核と酷似するC類石核が本石器群中に少なからず存在し、この特異な剥片剥離技術が柏原F遺跡や伊木力遺跡などの層位的所見から早期中～後葉の比較的短い時間内に盛衰し、前期以降に認められない事実とも整合する(註6)。

一方、石匙の存否に関しては即断できない面がある。引用してきたいくつかの遺跡例を見ると局部磨製石鏃の盛行期には石匙が伴わず、鍬形鏃の隆盛期に石匙の共伴が顕著である傾向を示している。たしかに石匙が縄文早期のある段階から出現することは疑いなく、それが局部磨製石鏃と鍬形鏃との交代期前後である可能性は極めて高い。しかし橘氏が指摘するように、出現期以降であっても石匙が出土しない遺跡は少なからず認められ（橘、前掲）、それが本質的な欠落なのか、単に発見されないだけなのかを判断することは困難だからである。広平遺跡の場合も調査対象範囲が全体の一部であり、本質的な欠落と断じることは危険だが、石鏃のサイズに注目すると全体に小形品が多く大形の鍬形鏃が少ない点で、比較的古い様相を示しているように思われる(註7)。この場合、石匙は本質的に欠落している可能性が考えられ、局部磨製石鏃が衰退し、主役の座を鍬形鏃と交替しながらも石匙は未だ出現していない段階として位置づけることが可能となろう。

結論的に本石器群の盛期は、特異な剥片剥離技術であるC類石核（≒柏原型石核）が存在することや石鏃の形態的特徴、および局部磨製石鏃の欠落から大略、柏原F遺跡Ⅱ層に相当するものと思われ、西彼杵半島では柿泊遺跡E地点(柏原F遺跡Ⅲ層段階)に後続する編年的位置が考えられる(註8)。

（渡邊　康行）

註－1　「半磨製石鏃」あるいは「部分磨製石鏃」と呼ばれたこともあるが、下川達彌氏の論考「局部磨製石鏃について」が発表されて以来、この名称が定着しつつある。

－2　弘法原遺跡の土器は平底を主体とするもので、報告書では早期末～前期初頭に位置づけている（高野1983)。この編年観については再検討を要するが、一定量の石匙が出土していることから考えても早期後半以前に遡るとは思えない。この場合、局部磨製石鏃の衰退期以降に遺跡が形成されたことになり、そうであれば局部磨製石鏃の分布圏内であるかを判断する対象とはならない。

－3　報告書に3点図示されているが、いずれも胴部のみを軽く研磨するもので、形態的にも縄文早期の局部磨製石鏃とは趣を異にするようである。文章記載がないために時期については不明だが、百花台遺跡では早期から晩期に至るまでの各期の土器が豊富に出土していることや、同様の局部磨製石鏃が縄文前期以降にも少数ながら存在すること（渡邊1996など）を考慮すると、早期以降の所産である可能性も否定できない。

－4　柿泊遺跡の発掘は、総合運動公園建設に先立つ事前調査として実施された。標高約130～160mの広大な開発対象範囲の中に遺跡が点在しており、旧石器～縄文時代を中心とする遺構・遺物が発見されている。本稿で引用した内容に関しては、調査を担当された長崎市教育委員会文化財課の宮下雅史・高田美由紀学芸員の御教示による。資料の実見および引用を快諾された両氏に謝意を表したい。なお報告書は今年度中に刊行される予定である。

－5　報告書によれば、A地点のⅢ層は旧石器時代の遺物を含んでおり、縄文時代の資料のみを分離することは困難であるとされる。また報告書を執筆された伴耕一朗氏からは、多くの御教示を賜った。

－6　伊木力遺跡は昭和60年、同志社大学の調査で縄文時代前期の丸木舟が出土し全国的な注目を集めたが、その後、長崎県教育委員会による調査も行われている。この調査では轟B式土器の良好な包含層を確認し、該期の堅果類貯蔵遺構（ドングリピット）も検出されている。そして恐らくは轟B式に伴うと思われる石器群の中に柏原型石核に酷似する資料が数点含まれていることを調査担当者の福田一志氏から御教示いただいた。実見したところ、柏原型石核の特徴を備えた

ものであり、これが確実に轟B式土器段階の所産とすれば当該石核の下限は若干下がることになるが、少なくとも曽畑式土器段階以降にまで残存する例は、今のところ見られないようである。

－7　柏原F遺跡の報告書では石鏃の大きさについて「Ⅲ層→Ⅰ層へと大型品が増加している。これは石鏃の大型化というより、例えば鍬形鏃等の大型品の添加という形であり、依然Ⅱ・Ⅰ層においても小型の石鏃は存在している」と述べられている。また下川達彌氏からは第3類に分類した石鏃の脚端が比較的丸みを帯びている点に関して、鍬形鏃の中でも古い段階の資料に多く認められる、との御教示を賜った。

－8　本文中で述べているように、あくまで石鏃とC類石核を中心とした場合の編年観であり、遺跡自体の開始期としてはナイフ形石器の存在が示すように旧石器時代に遡る可能性が高い。また包含層中からの出土ではないが、第14図83の局部磨製石斧については、いわゆる「長者久保・神子柴文化」の系譜上で捉えられる可能性があり（川道寛氏の御教示による）、同図86の小形三角鏃も佐世保市岩下洞穴第Ⅸ層や泉福寺洞穴第Ⅳ層の条痕文土器に共伴する石鏃と類似するもので、草創期～早期前半の空白を埋める資料とも考えられる。

[引用・参考文献]

麻生優1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会

安楽勉ほか1989「松山A遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ』

安楽勉ほか1994『畑中遺跡』島原市文化財調査報告書第9集　島原市教育委員会

安楽勉ほか1978『原の辻遺跡（Ⅲ）』長崎県文化財調査報告書第37集長崎県教育委員会

上野佳也1962　「鍬形石鏃考」『考古学研究』8－2　考古学研究会

小野ゆかり他1990『寄神貝塚周辺遺跡』岐宿町文化財調査報告書第2集　長崎県教育委員会

木下修ほか1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第8集』　福岡県教育委員会

久原巻二1988「島原半島の考古地理」『長崎県高等学校教育研究会社会科部会発表資料』

下川達彌1972「局部磨製石鏃について　－長崎県佐世保市岩下洞穴出土資料をとりあげて－」『長崎県立美術博物館紀要』1　長崎県立美術博物館

下川達彌1983「長崎半島の先史遺跡」『長崎県久賀島、野母崎の文化　特定地域の基礎文化調査報告書Ⅲ』長崎県立美術博物館

鈴木道之助1981『石器の基礎知識Ⅲ縄文』　柏書房

高野晋司・村川逸朗ほか1992『弘法原遺跡』吾妻町の文化財13　長崎県吾妻町教育委員会

高野晋司ほか1983『弘法原遺跡』吾妻町の文化財7　長崎県吾妻町教育委員会

高野晋司ほか1992『一野遺跡』有明町文化財調査報告書第11集　有明町教育委員会

橘昌信1980「石匙　－西北九州における石器研究（三）－」『史学論叢』第11号　別府大学史学研究会

橘昌信1982「無文土器」『縄文文化の研究3　縄文土器Ⅰ』　雄山閣

塚原博1996「目崎遺跡」『原始・古代の長崎県　資料編Ⅰ』　長崎県教育委員会

伴耕一朗ほか1986『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第85集　長崎県教育委員会

伴耕一朗ほか1990「肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報XⅢ』長崎県文化財調査報告書第97集　長崎県教育委員会

伴耕一朗1991「上八竜遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書第99集　長崎県教育委員会

福田一志ほか1980『ケイマンゴー遺跡』　長崎県文化財調査報告書第52集　長崎県教育委員会

福田一志ほか1982「牛込A・B遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第56集　長崎県教育委員会

藤田和裕1991「大久保遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書第99集　長崎県教育委員会

村川逸朗ほか1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第116集長崎県教育委員会

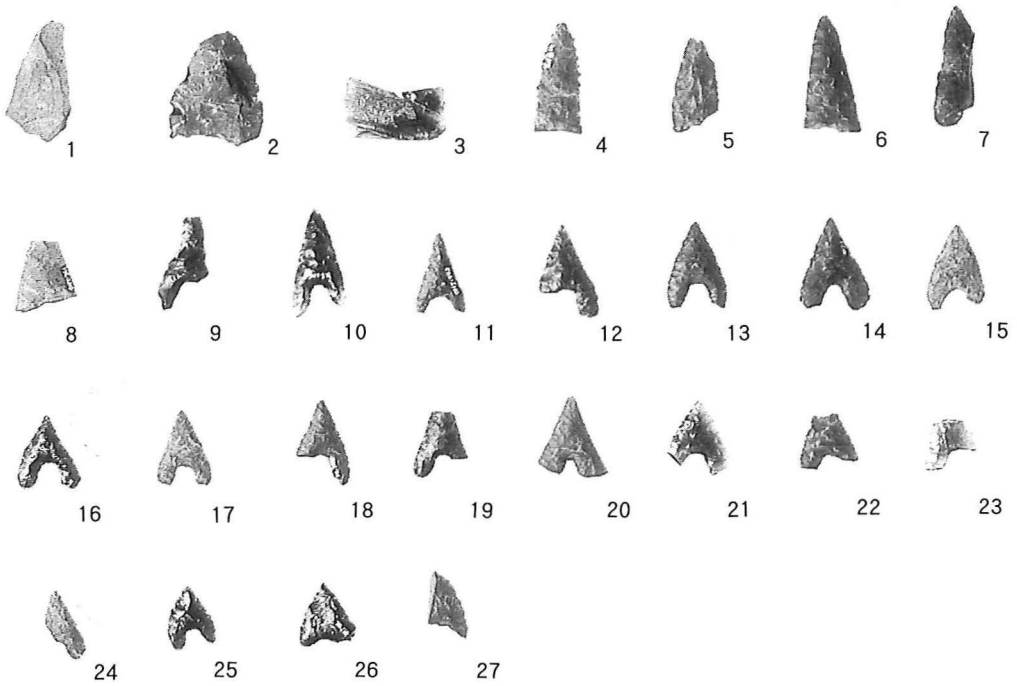
山崎純男・小畑弘己1983『柏原遺跡群Ⅰ　－縄文時代遺跡F遺跡の調査－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集福岡市教育委員会

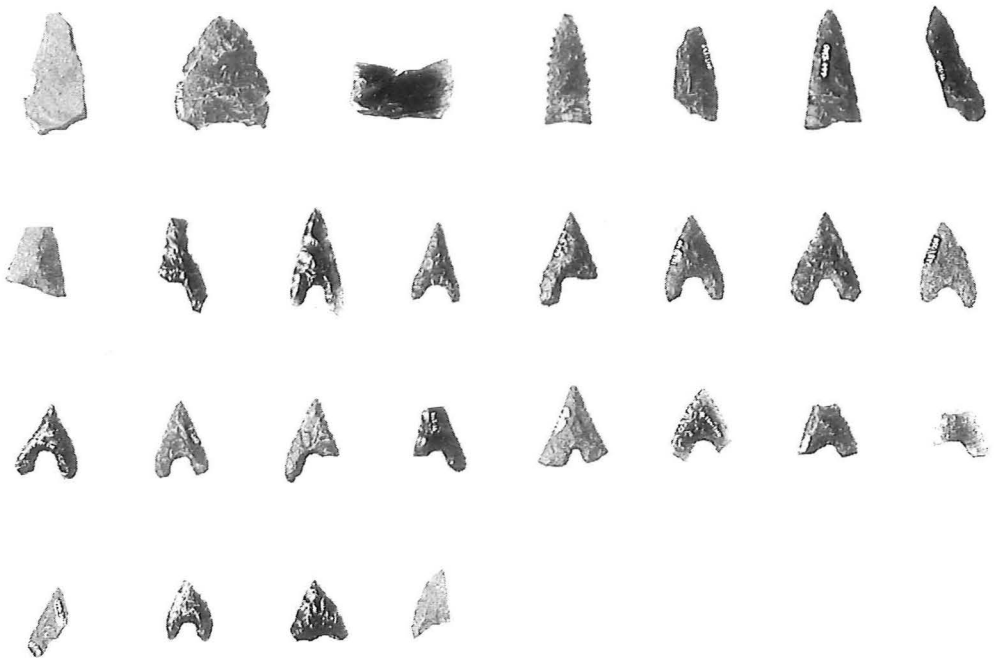
渡邊康行ほか1996『頭ケ島白浜遺跡』　有川町文化財調査報告書第1集　有川町教育委員会

図　　版

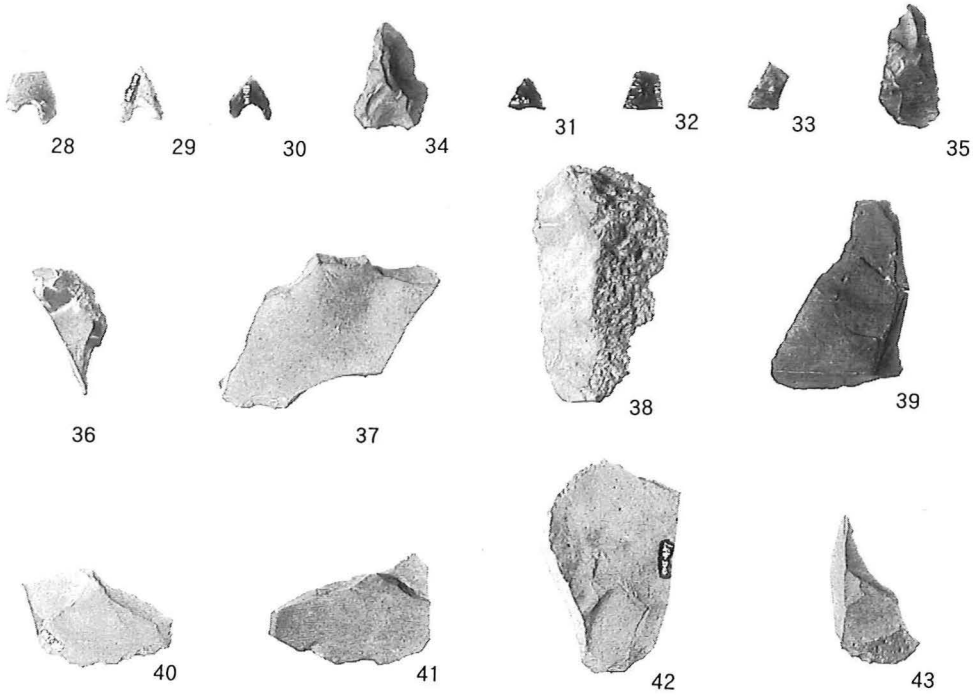
図板①　調査地遠景・土層

図板②　第４層出土石器①





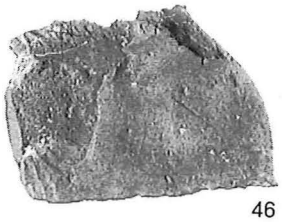
図板③　第４層出土石器②

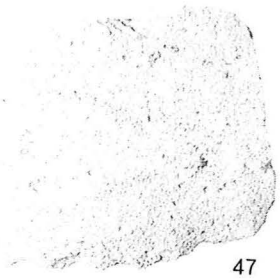


図板④　第４層出土石器③

44

45

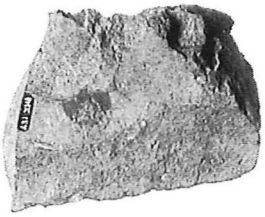

46

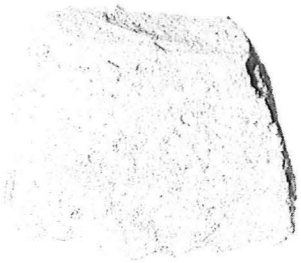

47

48

49

50





図板⑤　第４層出土石器④

51

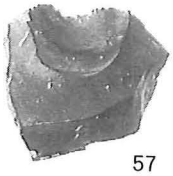
52

53

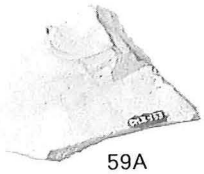
58

55

56

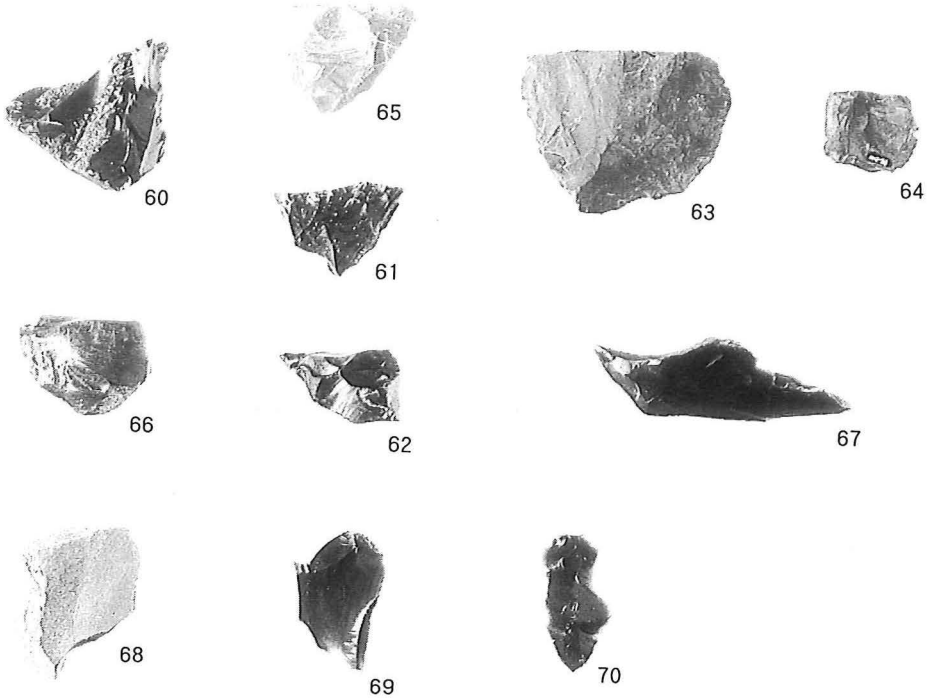

57

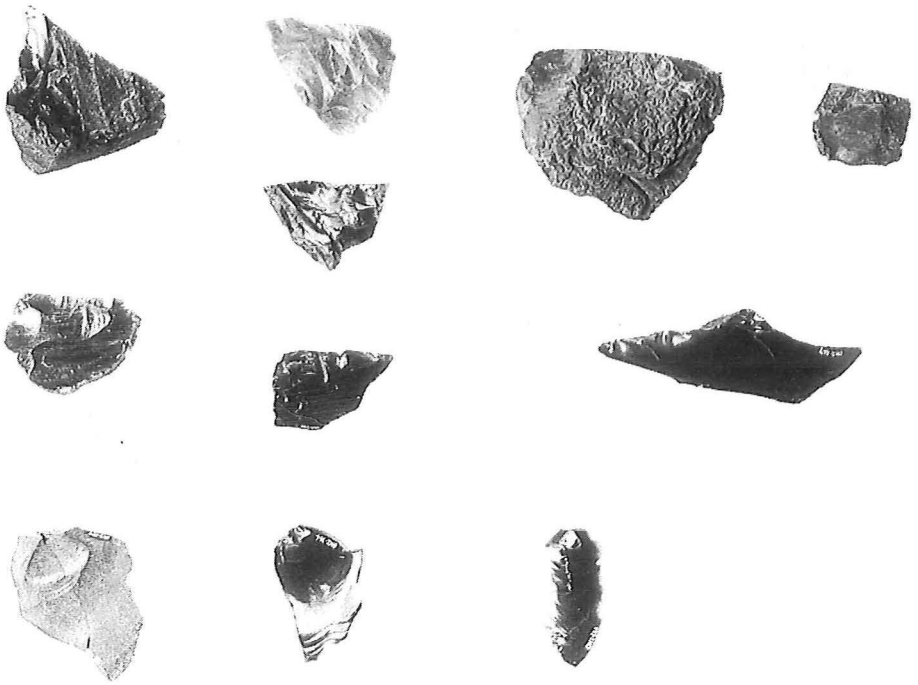
54


59A

59B

図板⑥　第４層出土石器⑤





図板⑦　第４層出土石器⑥

71

72

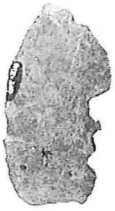
73

74

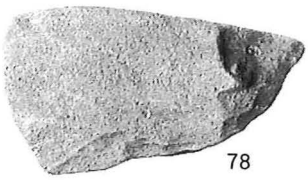
75

76

77

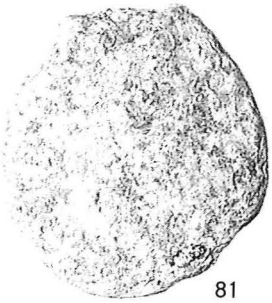


図板⑧　第４層出土石器⑦

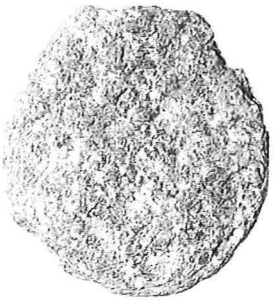

78

79

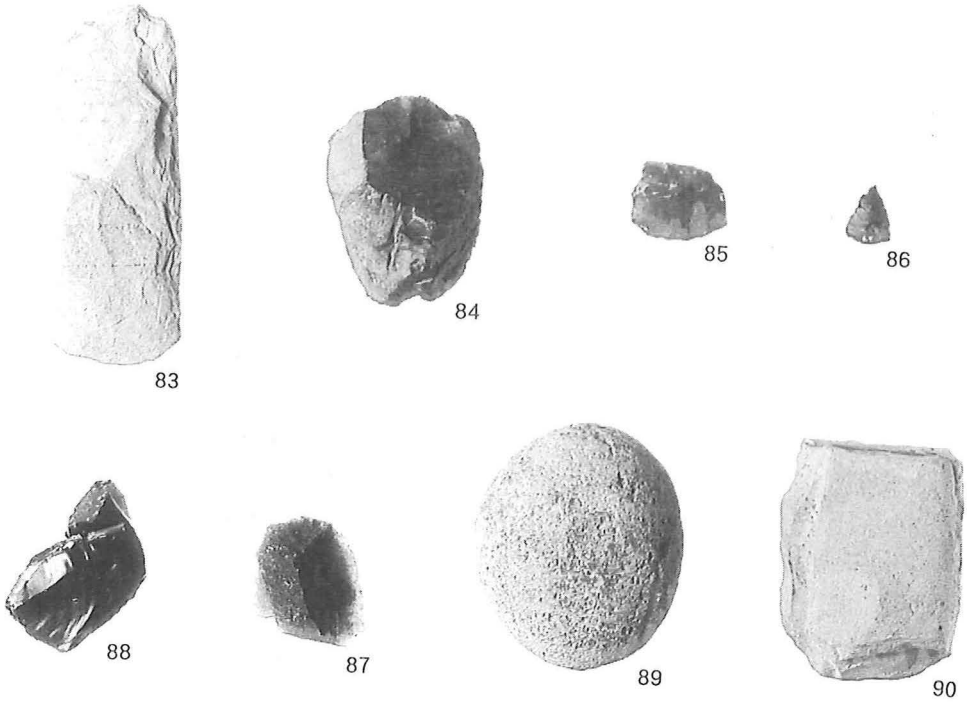
80

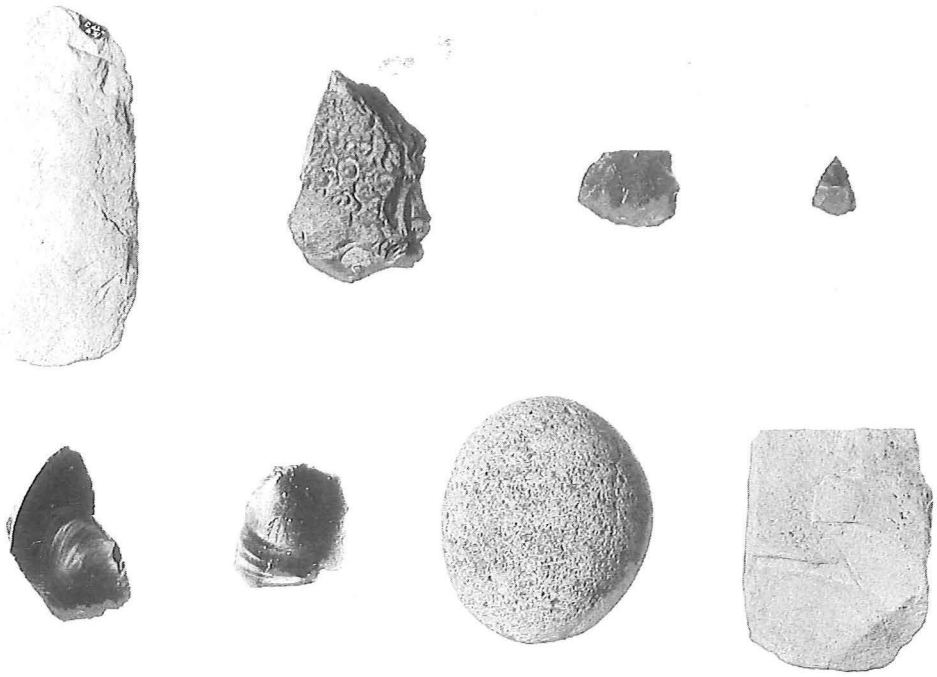

81

82



図板⑨　表土、排土、表面採集の石器





報告書抄録

ふりがな	ひろだいらいせき
書名	広平遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第137集
編著者名	古門　雅高・渡邊　康行
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850　長崎県長崎市江戸町２－13　　ＴＥＬ(095)824-1111
発行年月日	西暦　1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
広平遺跡 (ひろだいらいせき)	長崎県 (ながさきけん) 西彼杵郡 (にしそのぎぐん) 大瀬戸町広平 (おおせとちょうひろだいら)	42314	4	32° 57′ 59″	129° 38′ 28″	19960116 ・ 19960126	70m²	農道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広平遺跡	遺跡包含地	縄文早期		縄文早期石器	

長崎県文化財調査報告書　第137集

広　平　遺　跡

平成９年３月31日

発　　行　　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２－13
印　　刷　　株式会社　クイックプリント
長崎市樺島町８－12